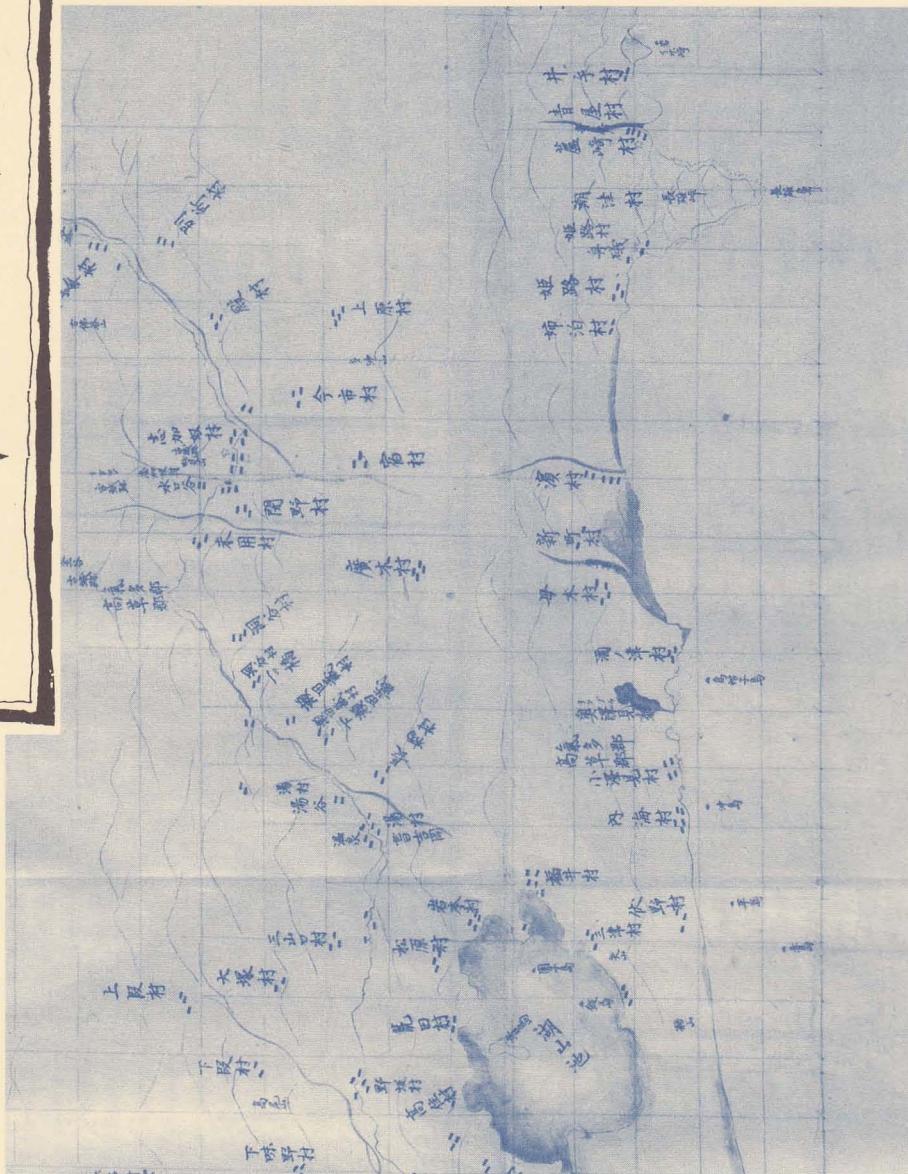


伊能忠敬研究

二〇〇八年 第五三号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

前号で紹介された「石井記録」は、多くの会員にとって興味深いものであったと思う。これに因んで「青谷」を含む大図を取り上げた。青谷は鳥取市西方の日本海岸にあり、現在は鳥取市に含まれている。藩の陣屋も置かれ、因州和紙の产地として知られる。ここでは地図上で青谷を眺めてみよう。

伊能隊はこの地域を文化三年八月（第五次）と文化十年閏十一月（第八次）に通った。それぞれ近辺には台風とおぼしき嵐や積雪の記事が見られる。文化三年には米子から海岸沿いを東に進み、蘆崎村泊は八月十五日である。青屋 蘆崎、潮津の三

村は、元は一村（それぞれ西・下・上青谷）で、惣名を青谷（青屋）としたことが、第八次の測量日記に見える。石井記録を残した石井世左衛門が天測を見学し、坂部貞兵衛を訪ねて懇意な示教を得たのはこの蘆崎の宿舎である。測量日記はこの夜の測量にふれていないが、地図上には星印がある。測線はここで長尾鼻の岬回りと横切りの街道に分岐している。

文化十年の第八次測量は内陸コースで、地図の範囲外にあたる倉吉から美（三）徳山三佛寺、湯村温泉（三朝）、鷺峯、鹿野（志加奴）を経て倉吉往来（美德通）を鳥取に向かう。この道は峠越えのため、忠敬、病氣の保木敬藏などと荷物が海岸回りとなり、青谷の世左衛門宅宿泊となつた。再会を期した坂部の死去を知つての世左衛門の落胆、また翌日鹿野まで天測見学に出かけ、思いがけず実現した忠敬本人との面談の詳細は「記録」の通りである。鳥取、鹿野から青谷へのルートは、因幡と伯耆を結ぶ主要道であった。しかし、青谷—鹿野間は測量されずおらず、したがつて地図にも描かれていない。

鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

巻頭

史跡探訪3「伊能測量隊・金沢の宿」

話題I
二〇〇八年度総会報告

「船手」史料発見

「石井記録」の新聞報道

「伊能大図フロア展」と「和算展」

「伊能忠敬と米沢街道」

「綾部のバカ息子」麻田剛立生家を訪ねて

話題II
講演「再現！海上引縄測量」

伊能大図総覧の地名と景観（七）

河島 悅子

伊能 陽子

芳名録
上杉慎吉 福士政一 緒方知三郎

研究ノート

伊能隊・東大寺の諸堂や宝物拝観

『伊能忠敬測量日記』に見る地震

伊能忠敬研究（三）測量実験と地図

伊能忠敬と米沢街道（二）

忠敬墓碑銘・十七歳の書者——關研

多摩における伊能測量（二）

九州支部だより

九州支部春季例会報告

忠敬談話室

例会案内

お便りから 日々の話題 お知らせ

表紙図解説 鈴木純子

河崎 倫代

河崎 遼一郎

渡辺 由尚

星埜 一六一

佐久間達夫

辻本 元博

石谷 春香

松宮 輝明

植田 浩一

河島 悅子

佐久間達夫

河崎 倫代

河崎 遼一郎

渡辺 由尚

星埜 一六一

佐久間達夫

辻本 元博

石谷 春香

松宮 輝明

植田 浩一

河島 悅子

佐久間達夫

史跡探訪3 伊能忠敬測量隊・金沢の宿「すみよしや」



丸に「開」の字は手判宿の標。忠敬一行の宿泊時に軒先に掛けられていた創業以来の大看板の前に立つ、当主の住泰守さんと女将の芳子さん夫妻。左が河崎倫代会員

◇所在地 石川県金沢市十間町 ◇概要 寛永十五年創業と伝えられる金沢で最も古い旅館。通行手形を発行できる手判宿でもあった。明治初期に創業地の尾張町（現・森忠商店の位置）から現在地に移転した。

忠敬さんも見た「すみよしや」の大看板

案内人

金沢市在住 河崎倫代

一九八〇年十月、「江戸時代の旅」展で伊能図に出会った。能登半島沿岸の村々が克明に記されていた。「一日漏らさず忠敬自ら書き記した記録」があることを知ったのは一九九一年三月。伊能図と出会って十年が経過していた。その時から始まつた加賀藩測量関係史料の調査。まもなく家人から「伊能忠敬のことを書いている人がいるよ」と手渡された「日本経済新聞」の切り抜き記事。早速、新聞社を通じて著者に連絡を取つた。それが渡辺一郎さんと研究会との出会いだつた。さて、『伊能忠敬測量日記』享和三年七月二日（一八〇三年八月十八日）の項には次のように記されている。

「朝より晴天、六ツ半頃宮越町出立、〔測量ニ量程車を用〕四ツ後二金沢城下尾張町へ着、止宿住吉屋太兵衛、此日、午前晴午後曇晴、夜ハ曇ル、曇間測量、子後〔大〕風雨」

たつたこれだけである。他藩では何の誰某が挨拶に来たと記されている。量程車を使用したのも不思議だ。会報四九号の表紙図解説でも書いたが、まだまだ書き尽くせない、ミステリアスな金沢測量！

測量隊八名が宿泊したのは八月十八日。私が訪問した日は終戦記念日の八月十五日。旧盆と夏休みで多忙な時期だったが、親切にもてなしていただいた。「伊能忠敬が泊つた宿ですよね、と聞いてくるお客様もいらっしゃいます」とのこと。近年は老舗旅館を希望する外国人観光客が増加しているとか。「伊能忠敬の宿」として、世界に発信して下さい」とお願いし、「すみよしや」を後にした。

（かわさき みちよ・伊能忠敬と灯台と民具の能登さいはて資料館）

NPO法人認可申請へ、皆さまのご意見を

編集部

去る七月二〇日、二〇〇八年度の伊能忠敬研究会総会が深川の富岡八幡宮で開催されました。全国から多くの会員が参考集し、一年ぶりに

再会した「忠敬ともだち」との語り合いを楽しみ、また研究会の新たな将来像にむけて積極的な討議をおこないました。当日はじつとりと汗が滲み出るような蒸し暑い日でしたが、忠敬先生の銅像はいさかも動じることなく、この日も着実な一步を踏み出そうとしていました。

第一部 講演『再現！海上引
繩測量』——唐丹でおこなった海上
引き繩測量実演について
講師・渡辺一郎名誉代表が「海上
引繩」測量をテレビロケの実演
を通して解説しました。講演は、
撮影現場の具体的な話を中心に、
スライドを使って臨場感ある一時
間ほどの講演でした。(なお講演内
容は今号十一頁以下で誌上再録し
ましたので、ご覧ください。)



の総会議事に入りました。はじめに定足数の確認をおこないました。
会員総数二一二名、出席者四三名、委任状七九名で総会が成立した
ことを確認しました。

議事に先立つて星埜由尚代表理事から挨拶があり、そのあと先般逝去された本会顧問・大友正道氏と同・小島一仁氏に全員で黙祷を捧げました。議長に渡辺一郎氏を選出し、議事を開始しました。

第一号議案 二〇〇七年度事業報告

鈴木事務局長より昨年度総会以降の二〇〇七年度事業について報告がありました。おもな事業は昨年一〇月の佐渡・新潟への研修旅行、ついで同月の伊能忠敬記念館「西日本測量と絵地図展」見学と記念講演聴講及び懇親会の実施、本年四月に佐原支部懇談会、五月に九州支部例会と、計三回の例会を実施したことが報告されました。また、会報『伊能忠敬研究』は第四九号から五二号を発行しました。

第二号議案 二〇〇七年度会計報告および監査報告

同じく事務局長より二〇〇七年度の会計報告として昨年四月一日から本年三月三一日までの収支について報告がありました。収支報告書中、收支が合わないよう見える点があるが、これは会報の発行が遅れたことにより本来三月中に収納すべき会費収入が四月以降にずれこんだためで本質的な誤差ではない旨、説明がありました。続いて清水靖夫監事より監査報告があり、出納ならびに帳票類などすべて適正である旨、報告されました。二〇〇七年度事業報告および会計報告は拍手をもって承認されました。

第三号議案 二〇〇八年度事業報告案

同じく事務局長より二〇〇八年度事業計画案について提案がありました。事業案として、本日の総会および一〇月の研修旅行(テーマ「忽那諸島から御手洗、吳に『伊能測量の原風景』を訪ねる」)

が提案されました。また、「例会」を今後、隔月で継続的に開催する（第一回目は九月一四日を予定）こと、また第二次ウオーカーの事業として「ウォーカ日本」「伊能大河ウォーカー」「完全復元・伊能大図展」等の行事を主催もしくは共催事業として実施することが提案されました。また会報『伊能忠敬研究』第五三号から引き続き発行していくこと、以上の事業が提案され、拍手により了承されました。

第四号議案 二〇〇八年度予算案

同じく事務局長より二〇〇八年度予算が例年並みの規模で提案され、拍手により了承されました。

第五号議案 役員追加選任について

今後予定される「第二次ウォーカー」や「例会」実施等の諸事業に対応するため、役員の追加選任が提案され、伊能敏雄さんと新沢義博さんが理事に加わることが承認されました。また、渡辺名譽代表が理事を兼任する件についても併せて提案され、了承されました。NPO法人認可申請について（ご意見を事務局へ＊宛先・会報最終頁参照）

昨年度の総会において話題となつた特定非営利活動法人化について、今総会において正式に提案がなされました。星埜代表より、今後、会が円滑な活動を行うためには、法人格を取得して責任の明確化をはかり社会的責任を果たす必要があるという観点から、定款・役員構成のひな型を示して提案説明があり、認証申請の可否について討議にはいりました。会員から「NPO団体は事務手続きが煩雑なので専従職員が必要になるのでは」「収入源は」「この総会で決定するのか」という質問が出され、それに対して「ボランティアで運営している団体にならいたい」、「この総会で大筋の了承が得られれば、理事会として認可申請をすすめたい」「理事会における検討の参考にするため、NPO法人化等について、会員の意見を広く聴く」

「今後、監督官庁と調整したうえで、最終的な定款案をお配りしたい」と回答があり、NPO法人認可申請の件は了承されました。



二〇〇八年度役員

顧問	幹事	監事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
問問	事事	事事	事事	事事	事事	事事	事事	事事	事事	事事	事事	事事
佐久間達夫	伊能陽子	坂本巍	清水靖夫	前田幸子	鈴木純子	斎藤仁	新澤義博	香取祐良	柏木隆雄	渡辺一郎	伊能敏雄	星埜洋
	編集委員	担当	担当	担当	担当	担当	担当	担当	担当	担当	担当	担当

第三部 懇親会

記念撮影のあと、懇親会に入りました。

恒例となつた「遠来の会員からのご挨拶」では、ご主人同伴で出席された方の微笑ましいお話や、富岡八幡宮に残る几号（水準点の標識）保存についてのご提案もありました。終始なごやかな雰囲気のなか、それぞれの日頃の研究や活動について語り合い、交流を楽しみました。



総会出席者

敬称略

秋間 実	朝岡 洋子	石川 清一	伊藤 浩史*
伊能 洋	伊能 陽子	猪原 純太	
植田 浩一	鵜飼 隆雄	江口 俊子	大沼 晃
荻原 哲夫	柏木 隆雄	加藤 忠三	今村 恵二
川上 清	河島 悅子	喜多 昭一	
齊藤 サダ	斎藤 仁	坂本 義親	滝谷 悅二郎
新沢 義博	鈴木 純子	首藤 郁夫	香取 祐良
永野 達代	成家 淑子	丹羽 菊乃	清水 靖夫
原田 照男	平岡 佳子	藤岡 健夫	中川 幸子
星埜 由尚	前田 幸子	渡辺 輝明	馬場 良平
矢能 彰	山本 公之	一郎	藤田 淑子
			宮内 敏

*ゲスト参加
伊藤浩史さん
(日本ウォーキング協会)

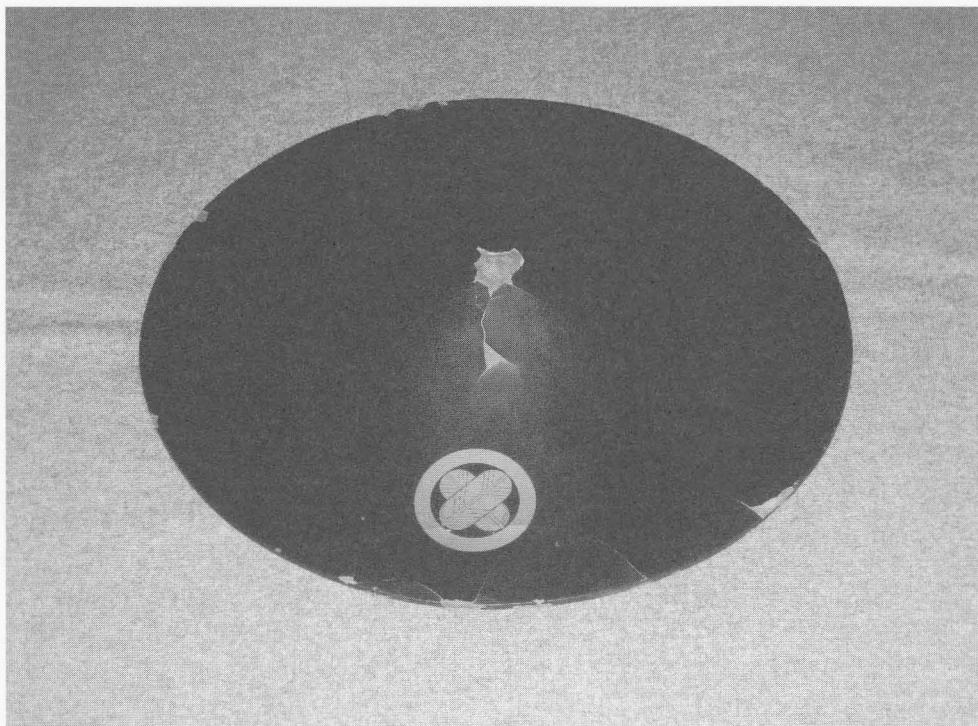
齊藤重則さん

は木谷道宣さんの代理

43名



特別展に初出展される伊能家の陣笠



『御手洗測量之図』
(部分)入船山記念館蔵

黒漆塗陣笠 (径 42 cm 高 5 cm) 年代、墨書なし

両面とも黒漆塗で、外側に伊能家の家紋が施されている。天頂部や縁の漆がはげ落ち、ひび割れも多く見られる。内側の頭に当たる部分の綿入れ布や紐などは残念ながらほとんど残っていない。

広島県呉市入船山記念館蔵『御手洗測量之図』の付箋には「黒陣笠御召被遊候、是か伊能勘解由様也」と書かれており、肖像画以外では伊能忠敬を特定できる唯一の資料であるが、本品がその時の陣笠かどうかは不明である。しかし伊能家歴代の人物で黒漆の陣笠をかぶることができた者は忠敬のみと想像され、彼の陣笠ではないかとの期待を含みつつ、今後の調査の進展が待たれる。いずれにしても、伊能家やかかわりのある人々によって大切に伝えられてきた貴重な資料であり、展示されるのは今回の特別展が初めてである。（資料・画像 伊能忠敬記念館提供）

伊能忠敬記念館 特別展 (平成20年9月9日～11月9日)

伊能図と人物としての忠敬の評価、また資料を守り伝えた伊能家について紹介する。【詳細 72頁】

収蔵品展 (平成20年11月11日～平成21年1月18日) 伊能図：伊豆七島 垂搖球儀

伊能測量の詳細記録発見！「測量方御用諸事覚帳」

唐津藩で異国船警備や物流従事



伊能忠敬の測量船など 詳細に

名護屋城博物館
1000点以上確認

船手 知る資料

唐津藩「船手」史料を名護屋城博物館が確認
—「九州大学デジタル・アーカイブ(左頁)」で公開中—

当時の海運業 検証でき貴重

物語など、藩全般の本の本の検証書き
史料は複数あるが、これでいよいよ船手の
貴重な資料だ

「船手」は藩の船舶関係の役人の総称。今回発見された「測量方御用諸事覚帳」には、伊能忠敬が唐津の海岸線を測量した際に乗った船や乗員の名前などが詳細に記されている。2008年8月19日 佐賀新聞

西日本新聞 2008年(平成20年)8月20日 水曜日 16版 社会・行政 28

唐津藩の海運担当部署

「船手」史料150点確認



伊能忠敬の測量記録(手前)が
確認された「船手」の史料=19
日午後、県立名護屋城博物館

伊能忠敬の測量記録も

KYUSHU NEWS
九州

九州・山口の主な取材網	
△北九州支社	093(561)1131 FAX 093(561)7793
△筑豊総局	0948(22)3500 FAX 0948(22)3503
△久留米総局	0942(32)5361 FAX 0942(32)5363
△佐賀総局	0952(26)7181 FAX 0952(23)8517
△長崎総局	095(822)0125 FAX 095(822)0126
△熊本総局	096(362)5111 FAX 096(362)5113
△大分総局	097(536)0111 FAX 097(536)0112
△宮崎総局	0985(25)1331 FAX 0985(25)1399
△鹿児島総局	099(222)9255 FAX 099(222)9257
△山口支局	093(922)1106 FAX 093(922)1402

伊能忠敬の測量記録(手前)が
確認された「船手」の史料=19
日午後、県立名護屋城博物館

伊能忠敬の測量記録も

史料は複数あるが、これでいよいよ船手の
貴重な資料だ

唐津市の名護屋城博物館

○一六年(1812)年の船の名前
や藩内船など、いわゆる
「測量方御用諸事覚帳」
(八二年)には、唐津を
訪れた船の名前(石進丸)
や船名などが克明に記録
されている。「遠山の雲」と
のモデルされた遠山景元
の父で、唐津藩の役人たつ
の船団が、公用で町子から毛
皮に渡された記録があつ
た。このほか異国船警備や
船が難破した際の対応が記さ
れ、船手の仕事ぶりから日
常までが分かる内容とい
う。

史料の目録は同大綱研究
博物館がインターネット上の
「九州大学デジタル・アーカ
イブ」で公開中。富浦教授
は「船の文書としては全国
最大級の分量だらう。江戸時
代の諸藩の海運研究に役立
つ貴重な史料だと話してい

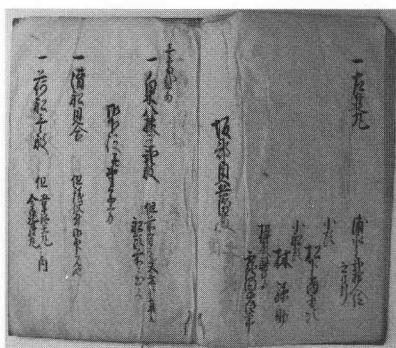
「測量方御用諸事覚帳」(1812年)には唐津を訪れた伊能が海岸線の測量に使った船の名前
「右進丸」や船員名などが克明に記録されている。西日本新聞 九州版 2008年8月20日

〔測量方御用諸事覚帳〕九州大学デジタルアーカイブ詳細情報

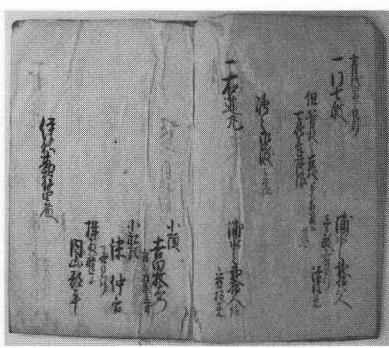
詳細情報

所蔵機関	佐賀県立名護屋城博物館
文書名	岩下家史料
史料番号	13
検番号	
表題	測量方御用諸事覚帳
年代	文化九年壬申八月
作成	
宛名	
形態	豎帖1冊
縦	25.6
横	17.5
丁数	31
内容	測量方の伊能忠敬一行が唐津領内に入り測量するにあたって、その対応を記している。
旧番号	228
分類	

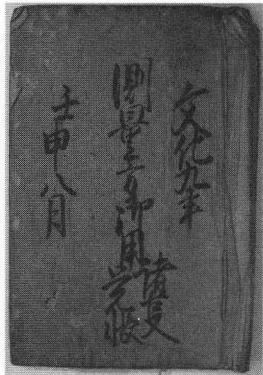
「岩下家文書」は、唐津藩に仕えた松下家に関する文書群である。松下家は、「船手」（=藩の所有する船を管理し、物資の海上輸送・沿岸警備にあたった）で「大船頭」などの役職を代々勤めた。(中略) のち本文書は岩下家に譲られ、平成6年に佐賀県立名護屋城博物館に寄贈された。総点数は1097点で、船手に関する簿冊類が100点余り含まれている。(中略) また船の難破、幕府巡檢使、測量方として訪れた伊能忠敬一行などへの対応の記録も残る。(以下略)
 (同アーカイブ詳細解説より)



坂部貞兵衛殿



伊能勘解由殿



右進丸

『文化九年測量方御用
諸事覚帳』表紙

【九州大学デジタルアーカイブ】で検索してください。原文が参照できます。

<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/search/details.html?seq=26>

『石井記録』新聞発表—新しい忠敬像が全国に—

二〇〇八年六月一九日の木曜日、本会の事務所がある目黒区の日本地図センターで「新史料『石井記録』発見」の記者発表が行われた。



新史料を前にした記者発表の様子

『石井記録』は会報第五二号でお知らせしたように、鳥取市青谷町在住の石井洋氏が所有する古文書で、三代・約百年にわたって書き記された石井家の記録。その一部に石井家の先祖「石井世左衛門」と、同家に宿泊した伊能忠敬とのやりとりが詳細に記録されていた。忠敬をはじめ測量隊と地元との交流が具体的に記載されており、從来言われてきた「きまじめ」「愚直なほどの忍耐強さ」というイメージとは一味違った忠敬先生の実像を垣間見ることができる。今回の『石井記録』の「発見」は、本会顧問で伊能忠敬研究家の佐久間達夫氏が、長年の知人である福嶋泰夫・千恵子夫妻と石井家の親戚にある小椋凱夫氏との連携プレイにより文書の写しを入手したことが発端となつた。

この文書の存在は地元では以前から知られていたが、記録の内容が貴重であることは知られていなかつたので、今まで世に出ることがなかつたらしい。これがきっかけで各地に埋もれている新史料の発見に繋がることが期待される。

『石井記録』掲載後日誌

「石井記録解題」筆者・佐久間達夫

研究会誌第五二号に掲載した『石井記録』の原本所蔵者石井洋様から丁重な礼状がまいり、そのなかに、「石井記録中、仮亭主露谷半兵衛を通じて、ご一行に甥世左衛門のことをお願いしている件がありますが、（中略）世左衛門は露谷半兵衛の甥にあたりまして、夷屋世左衛門は、即、世左衛門のことです」と、記してありました。したがつて、筆者記述の「石井記録解題」は、左のように訂正いたします。

（会報五二号二六頁上段後ろから七行目）

訂正後 石井世左衛門は、仮亭主露谷半兵衛に取り次ぎを依頼して、坂部貞兵衛から天文測量について聞きたい旨を願つた。坂部は、快く引き受け夜半を越える迄示教して下さつた。

（左頁）『石井記録』を報道した各社の新聞記事。MSN産経ニュースをはじめ各社のインターネット新聞にも掲載され話題となつた。

「測量の日」関連イベント

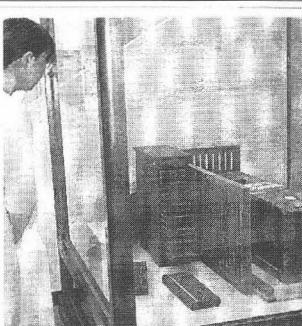
各地で「伊能大図」フロア展開催

六月三日の「測量の日」（国土交通省・主唱）にちなんで、全国各地で伊能大図展が開催されました。東京・新宿では「くらしと測量・地図展」として、新宿駅西口イベントコーナーで伊能大図のフロア展、伊能忠敬関係資料のパネル展、新旧測量機器の展示が行われました。取材当日は平日の昼間にもかかわらず大勢のサラリーマン、学生、主婦と思しき人々が訪れ、伊能大図や江戸府内図、富士山が描かれた床面などを熱心に鑑賞していました。壁面には伊能忠敬の生涯と測量行のあらましをイラスト入りで書いたパネルが展示され、こちらも横ばいに歩きながら、時間をかけて読んでいる人々の姿が見られました。とかく数値的・機械的な印象を与えがちな「地図と測量」の分野ですが、この伊能図と忠敬のコーナーには手作りの地図のオーラと、地図作りにかけた人生のロマンが横溢して、人々をひきつけていました。

A black and white photograph showing three men in a subway station. One man is standing on the left, another is crouching on the right, and a third is bending over in the center. They appear to be examining something on the floor. The background shows a platform with a train and some posters on the wall.

佐原で和算文化の企画展—忠敬の測量道具も

佐原の県立中央博物館大利根分館で企画展「利根川の和算文化」が開かれている（写真）。今が和算文化の発達した時代である。人間を育て、門人を育てた人間である。利根川の流域には、江戸時代から多くの知識人が訪れたが、山口和や特許官などの和算家である。一方では、地方の裕福な商家などに普及しながら、和算を教えた。門人を育てた。能登の地図などを測量に活用された道具、成田山に奉納された算額、和算に関する本など120点の資料が展示されている。



和算文化に焦点 香取で企画展

分から展示品の解説もある。
問い合わせは同分館(☎0478・560101)へ。

今年は和算家・関孝和の没後300年にあたることもあり、在野の和算家を中心に、地域文化としての和算に焦点をあてた展示が行われた。

2008年5月31日 朝日新聞 千葉版

開館三〇周年を迎えた香取市佐原の県立中央博物館大利根分館で、五月三一日から六月二九日まで企画展「利根川流域の和算文化」が開催されました。和算を応用した伊能忠敬の天体観測や測量道具など、実際に活用された和算文化が紹介され、伊能図のほか成田山に奉納された算額、和算に関する本や小説など一二〇点が展示されました。河川水運で栄えていた利根川流域では取引等で日常的に算術が用いられていましたが、さらに高度な分野に関心を持つ人も多くおり、忠敬もその一人でした。

「再現！海上引綱測量」——唐丹で実演口ヶ

渡辺一郎

○船

梵天船 二

先繩船

一

跡繩船

一

羅針船

一

札取船

一

中取船

一

親船

一

計 八隻

これらの船には対馬藩が行つたように、役割名の立て札を立てた。

ちなみに、宗家の記録ではこの船隊を二組用意している。

それぞれの船の役割



ないが、長崎在住の入江正利会員が解説した『対馬藩宗家文書』のなかに測量船隊の名称が出てくるので、それを参考にして必要な船と器材を用意した。

◇伊能測量隊が三陸海岸で行つた海上引綱測量の様子を地元テレビが実演ロケ・撮影しました。本稿はそのロケを監修した渡辺一郎氏の講演内容をレジメ及び資料をもとに再構成したものです。（編集部） ◇

はじめに

岩手県の三陸海岸はリアス式の地形で陸上からは測量ができず、伊能測量では海上に縄を引いて苦労して測量した場所。釜石市唐丹町大石浜にはこれを記念した「海上引綱碑」が立つてある。同町は「測量之碑」「星座石」と共に、伊能測量には御縁が深い土地である。

今回の「海上引綱測量」実演ロケは、岩手「めんこいTV」がフジ系列のコンテストで入賞し、予算を獲得して計画されたもの。担当ディレクターは現地に二回足を運んで打ち合わせ、渡辺との打ち合わせも二回行つた。用意すべき資材、実施要領は図解して指示し、ディレクターが取りまとめた。

実際のロケでは、平成二〇年六月六日に、打合わせ、資材の準備、作業説明ならびに地上演習を二回行い、翌六月七日に実演と撮影を行つた。ロケ現場は大石浜—仏ヶ崎の海上。地図上の距離は二・一kmだった。

資材と要員

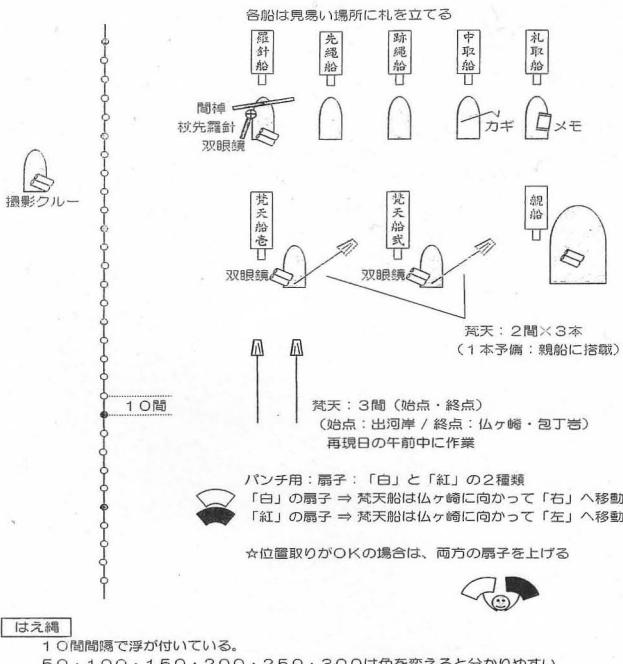
伊能忠敬が三陸測量時に、どれほどの船団の協力を得たかは記録が

を記すと、梵天船は梵天を高く掲げて位置の目印となる船、先繩船は間繩を引く船、跡繩船は先繩船が引く間繩の末端を保持して距離測定の起点となる船、

海上引縄測量 使用機材・小道具

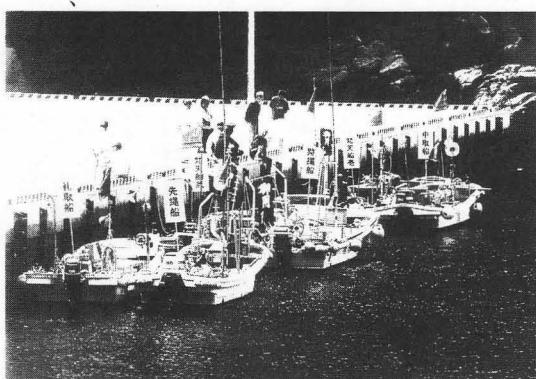
○ 羅針船は杖先羅針を装備して方角を測る船、札取船は測定結果を記録した札を回収する船、中取船は長柄付の手カギで間縄が直線になるように補助する船、親船は船隊全体の指揮をとる船である。これらの船のうち、梵天船と羅針船、親船は双眼鏡を装備しており、お互いの位置を確認しながら作業を進めていくことにした。

○ 梵天 三間以上のものを四本用意。梵天船用二本、仏ヶ崎一本、大石浜の測量記念碑の傍らに一本を立てた。梵天竹は近くの山から切り出して自作した。



- 間縄：現在実際に漁で使用しているまぐろ縄に一〇間（一八m）ごとに浮（うき）をつけ、一〇個ごとに浮の色を変えた。また浮に数字を書き込んで距離を直読できるよう準備した。全長は三一〇間（五五八m）である。
- 羅針：今回のコースは直線部のみで、方位は直線の維持のみであったが、漁船用コンパスを杖先に取り付けて確認に使用した。
- 小梵天：船間の連絡手段は初めから懸案だったが、小梵天を各船に用意し、終了は丸を描き、了解は縦に上下することとした。進路維持のため、陸からも観測者（パンチ佐藤）が大扇でサインを送ることとしたが、これを確認できる双眼鏡を梵天船上に用意し、小中学生成が観測員として乗り込んだ。
- 要員：乗組員は少ない船で三名、多い船は四名だった。
- 別に撮影機材として、カメラ船二隻、陸上カメラ一台を用意した。以上の膨大な準備は看板など一部を除いては、地元大石集落の住民ボランティアの協力であった。

番組の出演者は、進行役として元野球選手でタレントのパンチ佐藤氏を迎えた。自身は神奈川出身だが、パンチ氏の親が岩手の出身という縁。他の出演者はすべて地元の有志。大人三〇数名、小中学生四名の参加だった。



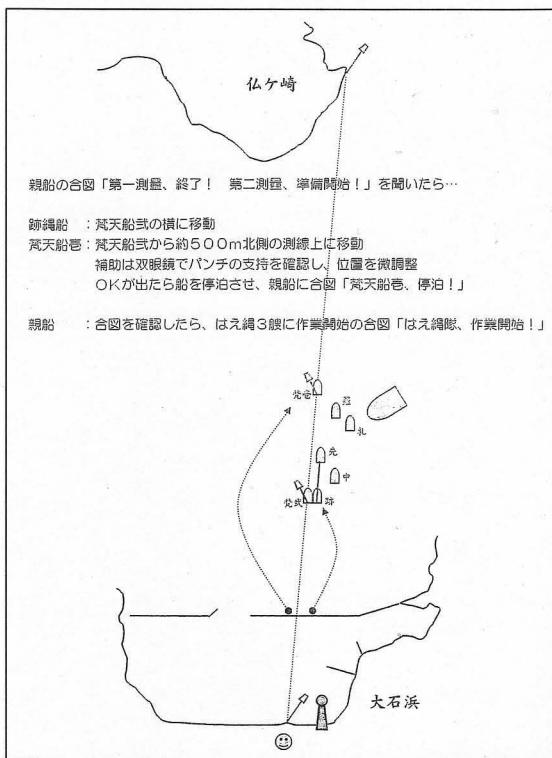
船には役割名を書いた立札を立てた

海上測量の実際

ロケは一三時三〇分に開始、一四時四五分に終了した。当日、海上は晴れ、好天で風だったが、それでも船はかなり揺れた。漁船の大きさは、長さ三間（五・四m）、幅一間（一・八m）くらい。ヤマハかヤンマーのエンジンがついていて結構速い。三〇キロくらいは出そうで、モータボートのように走る。船尾でも船首でも操船できて、横にも動ける。測量の実演は概ね次のようにあった。

(1) まず大石浜と対岸の仏ヶ崎の両岸に梵天を立てる。この二点を結ぶ線が海上の測線となる。

(2) 測量の基点である大石浜近くの海上に「梵天船二」と跡縄船が停泊している。「第一測量、開始！」という親船の合図で先縄船が北側約五〇〇mの測線上にいる「梵天船二」をめざして次々に浮をつけた



間繩を海に投入しながら移動する。中取船は投入された間繩がたるまないよう手力ギを使って補助。羅針船からは、その方位を確認。跡縄船は間繩の末端を保持したまま、定位置に留まっている。

(3) 先縄船は五〇〇m移動したら停泊し、「梵天船二」がその位置に移動する。そして測定数値を記録、「第一測量終了！」を合図する。先縄船は投入した間繩を巻き取り第二測量に備える。その間に跡縄船は「梵天船二」の横に移動、「梵天船一」は「梵天船二」の約五〇〇m北側測線上に移動する。

間繩を回収した先縄船は今度は「梵天船二」を起点に「梵天船一」めざして間繩を落としていく。測定値を記録するのは梵天船に乗つている記録係。梵天船は先に進みながら入れ替わるので、札取船が順番にその数値を回収・整理する。

この繰り返しで仏ヶ崎までの距離を測った。これら船隊の動きは、大石の浜で紅白扇子を振るパンチ佐藤氏の指令に従つて行われたことは言うまでもない。

各船に乗り込んだ観測員は双眼鏡でパンチ氏の指示を確認し、位置を微調整。O・Kが出たら船を停泊させ、親船に合図。親船は合図を確認して指示を出す。以上が海上引縄測量ロケの全貌である。

実演の感想と反省

(1) 三間（五・四m）以上の梵天に初めてお目にかかつたが壯觀である。それでも二km先の対岸に立てるとは小さすぎる感じである。記録



空高く見えるのは梵天 祭半纏で指揮

に出てくる梵天の寸法は三間が最大であるが、実際にはもつと高い梵天が使われたかも知れない。

(2) 繩船はどちらが縄をくりだすのか、わからなかつたが、地上演习で漁師さんの一言で解消した。「縄は引けないよ、先縄船が落としてゆかなければだめだ」といわれ了解して、そのとおりとした。この縄を巻き取るのがまた大変であつた。縄端を保持している跡縄も縄をたぐれなかいか、と指示したが、難しいようだ。

先縄がスピードを出して、同じ速度で縄を手繰りながら戻るのがいらしい。先縄船の漁師さんはやかましかつたが、よくわかつていて、予め若手を一人船に乗せており、彼らに縄手繰りさせていた。実際にも先縄が一番活躍した。

時間的にロスがあるが、解消にはもう一隻予備の縄船を出せばいいという結論だった。

(3) 札取船にはテーブルを積んで作業しやすくし、歴史研究家、元小学校校長さんなどが乗り込んだ。そのテーブルはわざわざ作ったのかと聞いてみたら、鮭の定置網漁で必要なのだという。それぞれに工夫しながら資材を持ち寄ってくれた。説明の前に各人の役割を決めていたので、それぞれ準備してくれたのは大変よかつた。

(4) 扇を振つての合図は、浦島測量の図に出てくるので、行われたところはあるかも知れないが、長距離の海上引き縄では一般的でない

(5) 各船の役割、運用はすべて筆者の判断である。詳しい記録がないので、他の地域の情報などを考慮して推定した。

(6) 筆者の親船は全体が見える位置にいて若干の指導をしたが、ほとんどは地上演習通り行われたのでトラブルは全くなかったといつていい。しいて言えば、最初はとまどいがあつて動きが鈍かつたので、

前に出るとか、もっと近寄れ、という必要があつたが、二区間目あたりからは、さすがに動きがよかつた。

そこで、気がついたのだが、親船は乗つて作業するものではなく、作業休憩、あるいは昼食など隊員の休憩用だと分かつた。隊員は羅針船、札取船、先縄船などに乗つて自ら作業し、あるいは補助作業の指導をしていたと思われる。

(7) 予想外のトラブルの場合、全部中止、やり直し、

まで考えていたが、大きなトラブルがなかつたのは幸いだつた。途中、一度縄の上を他の漁船に走り抜けられ、縄を切られたかと心配したが、引つかかって大きく引つ張られた程度で済んで幸いだつた。逆に浮きがあつても縄はそれほど沈むということもわかつた。

湾内では帆立貝の養殖をしており、その籠の上を縄引きしているので籠に引つかかつた例があつたが、直ぐ外して終わり。親船に同船していた長老は「心配ないよ」と言つてくれたので気にならなかつた。



抜群のチームワークを発揮した地元ボランティア

測量の精度

今回の計測結果は目測した最終部分二〇間を含め一、一三三間、二、〇六〇mであった。国土地理院の地図上では二、一〇〇m、伊能忠散の大図上では二、〇八八mだったから、いい成績だったと考える。

精度を問題にするなら無理だよ。形だけ整えばよしとせねばなるまい、といつて始めた仕事だったが、こんなにいい結果が出て、関係者は驚いていた。「こんなことで結構合うんだな」という感想でした。最終の岬部分が波が高く、難しいので札取船の判断で目測としたが、キンと測ればよかつた、という反省がしきりだった。

伊能隊がここを踏査したときは、仙台館で散ら引き縄を行つてきており、隊員はベテランだった。数字の一致は誤差が打ち消しあつた偶然の結果であろう。しかし、苦労してくれた地元の人々には嬉しい結果だった。

大石浜の人々

大石集落は戸数約五〇戸。ほとんどが漁業者。ホタテ、わかめ、昆布の養殖と、少し沖合にある鮭の定置網漁に従事している。一部で牡蠣とムール貝の養殖もおこなっているが、仕事としてはホタテ、わかめ、昆布が主力と。定置網は漁協の事業で、シーズンには給与をもらう。ホタテは稚貝の採取は共同事業、養殖は個人事業で海面が割り当てられている。生活は安定していて、農業者よりは楽という。ただ、我々には危険があるとは町内会長の弁。救命胴衣を着けていないと、事故があつても保険が出ないなど、安全対策はシビアである。漁船は安全対策で高い竿の先に赤い旗を立てて走っている。

この集落によく海上引き繩記念碑が出来たと感心するが、唐丹自体昔から良港で繁栄しており、文化度も高く、明治五年に小学校ができる

岩手めんこい	T V	9月5日(金)	19:00~
北海道文化放送		9月6日(土)	13:30~
秋田テレビ		9月6日(土)	13:30~
福島テレビ		9月6日(土)	13:00~
さくらんぼ	T V	9月7日(日)	15:00~
仙台放送		9月13日(土)	13:00~
フジテレビ(深夜)		9月27日(土)	26:55~
その他のフジ系列局		10月~	独自時間帯



大石浜に立つ「海上引纏測量碑」

(わたなべ
いちろう・名誉代表)

た直後、釜石には一校しかなかったが、唐丹には三校もあったたといふ。葛西昌丕の伊能測量記念碑が有名だが、伊能測量を受け入れる文化的土壤があつたのだろう。今回の徹底的な協力も、これまでN H Kでもやらなかつたことに、挑戦してみようという風土かと思われる。優良漁村としての誇りを感じた。

残念ながら子供は高校生一人、中学生一人、小学生三人だといふ。その一方で、この集落にはピカピカの消防自動車一台が配備されてゐる。みんな消防団員だともいっていた。昨今めずらしい集落共同体生的基盤があり、今回のロケへの対応も集落全体がすぐまとまつたと云う。二百年前の伊能測量隊の海上引綱実測の際も、この浦の漁民の助けが大いに力を発揮したことであろう。

伊能大図総覧の地名と景観(七)

星埜由尚

平塚から厚木

平塚から厚木周辺は、第九次の測量による成果である。忠敬は、高齢のため参加しなかつた。従つて、弟子達のみによる測量である。測量日記には毎日の行程が詳しく書かれており、特に社寺の記載は詳しい。弟子達による測量も忠敬同様に几帳面に記録が付けられている。

第1～5図は、厚木付近の大図で、平塚を出立して八王子に向かうまでの測線が描かれている。

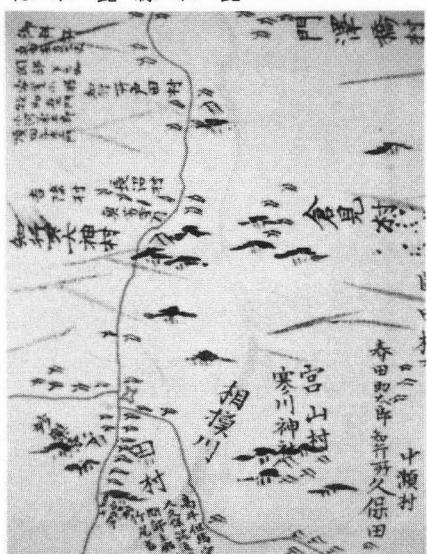
第1図は、平塚付近を拡大した図である。平塚には、○印と☆印が付せられている。東海道に沿った宿場の様子が家並みでもつて表されている。平塚新宿で測線が分岐し、測量日記^{*}によれば、文化二三年（一八一六年）三月一一日平塚を出立した測量隊は、北へ向かって厚木道



第1図 大図第99号 平塚

木道にはいると等覚院がある。等覚院は日記には記録されているが、大図には記載されていない。しかし大図には八幡社の表示があり、青い屋根と赤い破風の薺

が描かれ、その手前には同じような壺の絵があり、これが等覚院であろう。
八幡村から四宮村を通過し、田村に達する。日記には、泉藏院、高林寺、北向智院、妙楽前取神社である。図にも表示さる。



第3図 大図93号 大神村

(第5図の一部 左中央部分)



第2図 大図第93号 田村

(第5図の一部 左下方部分)



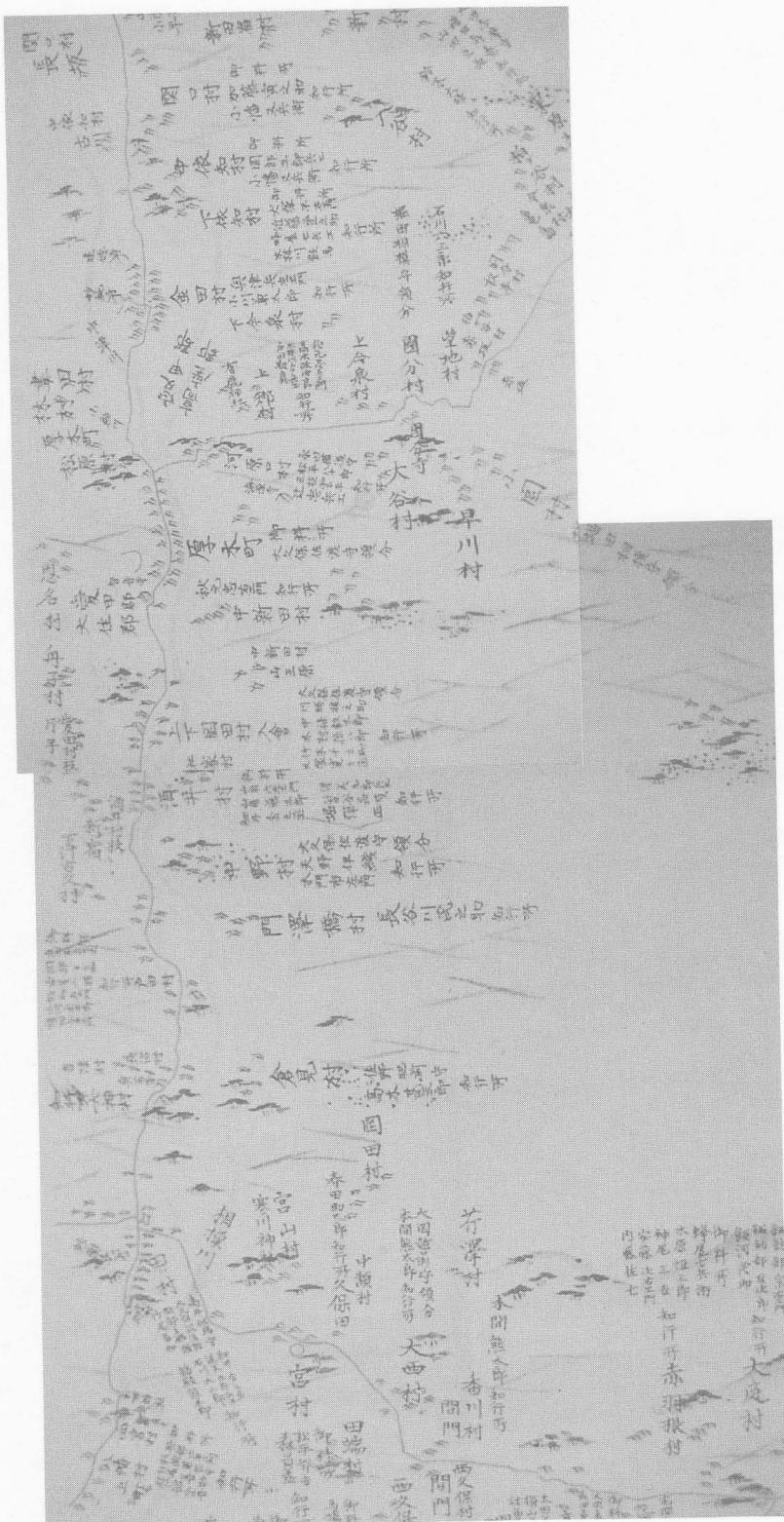
第4図 大図第93号 岡田村

(第5図の一部 左中央部分)

守とは、下野國烏山藩主大久保佐渡守忠成である。大久保家には本流の小田原藩大久保家があるが、厚木は、小田原に近いとは言え、大久保家支流の烏山藩が相模に一万石の領地をもち、厚木陣屋を設けて支配していた。厚木町は、下町、中町、天王町と分かれており、天王町で宿所の前に王印を残した。大図を見ると、厚木町の北端近くで測線が分岐するが、ここがその分岐点に当たるものと思われる。厚木町には、智音寺という寺院が描かれているが、真言宗海老名惣持院末摂光山智音寺と言い、御朱印三石である。智音寺は、厚木市旭町二丁目に現存し、地元では竜舌蘭の寺として有名で、室町時代には厚木氏の館があつたと言われている。

三月一二日厚木町を出立し、酒井村の分岐の印に戻つて、大山道を西に向かつた。この分岐の測線は、前述したように大図第93号には描かれていない。図の端であるところから、おそらく内務省が模写したときに脱落したのであろう。大図第99号（第5図）にはそのつながりが明瞭に描かれている。三月一二日には、大山道を上糟屋村子易まで測量している。愛甲村（第7図右中央）には、樹木に囲まれ、大きな甍の見える家並みが描かれているが、測量日記には、測線右側に熊野権現、大嚴院、宝積寺、長福寺、愛甲三郎古城跡があると記されており、大図には記載されていないが、大きな甍はこれらの寺社等を示しているものと思われる。同じように、石田村（愛甲村の南）には、青い屋根と赤い破風の甍が描かれ、日記には、測線左側に松林の中に子安明神、西本願寺末金林山長竜寺と記されている。

高森村を過ぎ、下糟屋村に入る。上下合わせて糟屋村はかなり広い。現在も伊勢原市の大字として上粕谷、下粕谷がある。下糟屋村に入る。と「歌川石橋巾一間」と日記にあり、第7図の下糟屋付近の流れが現在の歌川である。現在では改修が進んで河道が直線状になつている。

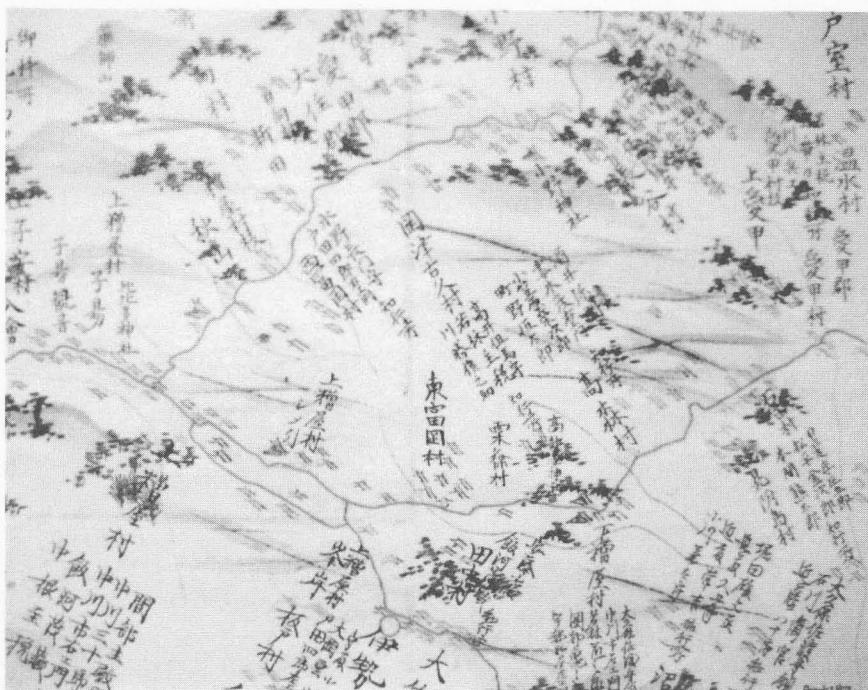


第5回 大図93号 平塚・厚木道



第6図 2万5千分1地形図 「厚木」「座間」の一部

日記には、右に普濟寺、左に大慈寺、さらに右に式内高部屋神社とあり、大図に描かれている甍がそれぞれに相当するのであろう。高部屋神社は、社殿のように描かれ、大図にも注記されており、「祭神五座、応神天皇、仁徳天皇、神功皇后、住吉大明神、姫大神。祭礼八月十五



第7図 大図99号 愛甲郡（第11図の一部 下方部分）



第8図 大図99号 小野村から荻野山中
(第11図の一部 上方部分)

日」と日記に記され、当時は地域住民の信仰を集める大きな神社であったようである。現在は、地形図にも記載がない由緒ある神社である。

下糟屋を挟み南側を流れる小河川である。上糟屋村に入り、「嶺岸」(大図では峯岸)、「辻」、「山王原」、「石倉」と通過する。これらの字地名は地形図にも見られる。大図(第7図)に見られる地名「シメ引」も地形図には表示されている。石倉では、文化八年(一八一一年)第二次九州測量の藤沢から大山への測線につないでいる。上糟屋村シメ引には大きな甍が描かれているが、日記にある山王権現がこれに当たるのではないかと思う。石倉にて「旧測の当たり不動石碑に繋ぐ」とあり、不動尊の石碑を測量基準点としたようである。

三月一三日、子易から荻野道を北へ向かっている。上糟屋の村枝秋山を通過し、字一ノ牛王と日記には記載されている。これは、地形図に見る一ノ郷であろう。「右三町許引込熊野権現」との記述があるが、

荻野道の測線の南、渋田川の支流の脇に高部屋神社と同様の社殿を描いたと思われる絵記号があり、これが熊野権現であろう。また、秋山の手前に大きな壇が描かれているが、日記には「左に」の牛王堂あり」となつており、このことかも知れない。秋山では、日向村の薬師道が分岐する。日記によると日向山靈山寺薬師御朱印六十四石で日本三薬師のひとつであるとされている。大図には日向薬師の記載はないが、「薬師山」の注記が見られる。因みに日本三薬師とは、越後米山薬師、參州鳳來寺薬師、当國靈山寺薬師であると日記には書かれている。

地形図には日向薬師と表示されており、日向山靈山寺と言い行基が開いたと言われる古刹である。かつては多数の坊もあり大変栄えた靈場であつたが、廢仏毀釈により多くの堂舎が破却の憂き目にあつた。しかし、現在も多数の文化財が残り信仰を集めている。現在では、三大

薬師は、鳳來寺薬師ではなく高知県の豊樂寺柴折薬師（国宝薬師堂）あ

り）となつてているようである。^{*2}

測量隊は日向薬師には行っていないが、西富岡村、日向村、岡津古久村を通り小野村に達する。日記には、小野村から左一里ばかりの所に「天台宗上野陵雲院末無常山淨發願寺山内御朱印十六石五千六百坪」^{*3}と書かれている。また、「右三十町山裾に曹洞宗（中略）医王山石雲

^{*2}日向薬師については、Wikipedia の記事を参考にした。

^{*3}佐久間達夫「伊能忠敬測量日記伊豆七島測量篇」では、「淨發願寺、

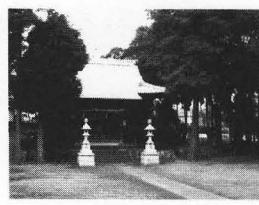
寺」とあり、右三十町が理解できないが、現代の地形図を見る

と日向薬師の奥

に淨發願寺、さ



第9図 長谷寺
坂東六番札所



第10図 小野神社

らに奥に石雲寺がある。西富岡村、日向村、岡津古久村など、現在もそれらの地名は地形図上に見られる。第8図には聞低寺と書かれた寺院が描かれているが、日記には聞修寺となつており、図の写し誤りである。聞修寺は、南北朝あるいは室町時代に遡る古刹で、現在山門が残り、厚木市の指定文化財となつてている。

測量隊は、小野村、長谷村、相名村、飯山村、及川村、荻野村と通過し荻野村に止宿している。この測線に沿つては、多数の立派な壇が描かれており、その幾つかには小野神社、長谷寺、竜藏院、板東六番

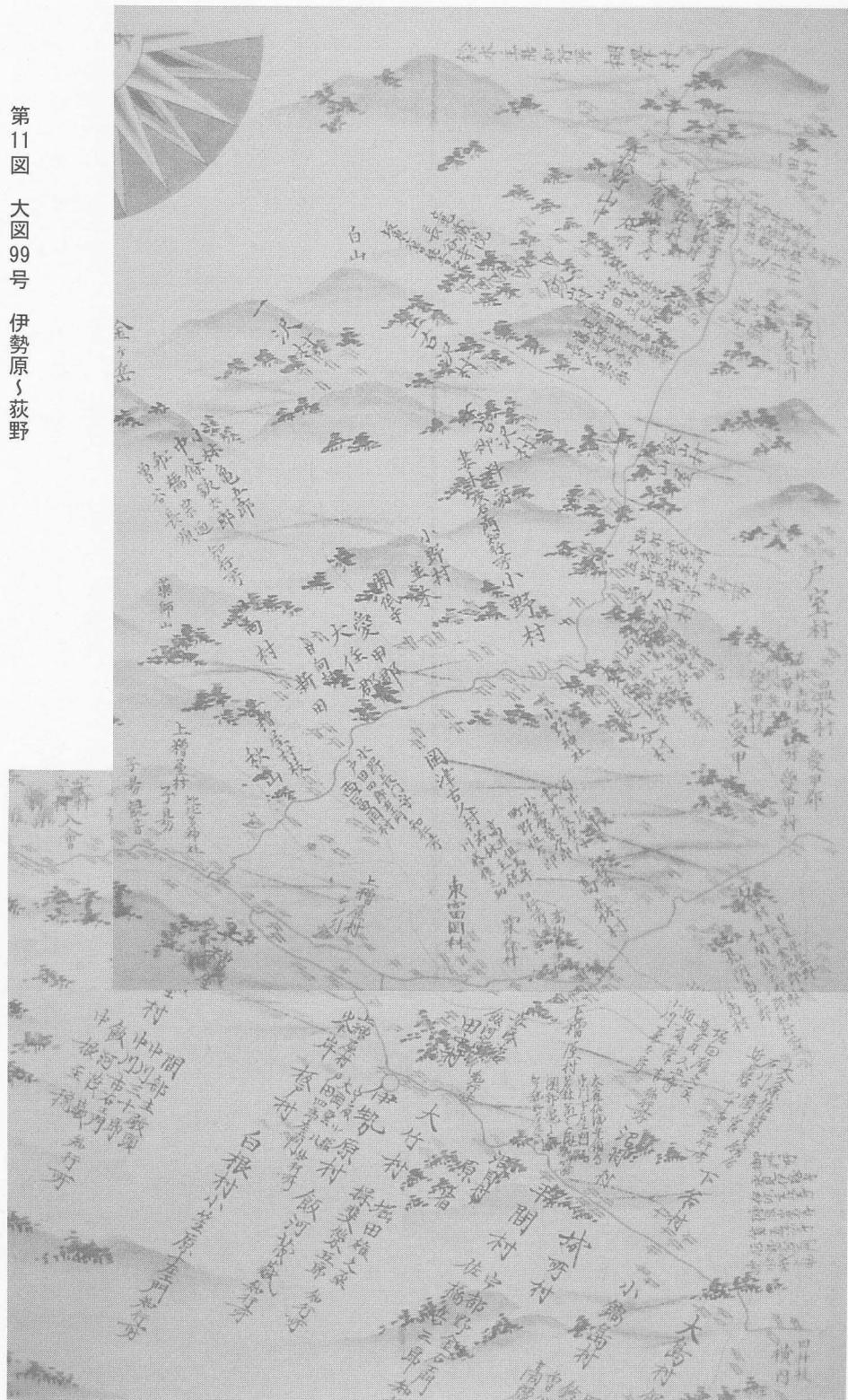
観音堂の注記がある。小野神社については、測量日記では「(前略)閑香

明神の社、式内小野神社、祭神下春尊」となつてている。長谷寺は、真言宗の古刹で板東六番札所として信仰を集めている。第8図には、白山と書かれた山が長谷寺の背後に描かれているが、地形図でも、白山（一八三・九m）の山裾に長谷寺がある。竜藏院は、飯山竜藏権現がこれに当たるのであろう。

このほか、妙昌寺、諏訪明神社、本禪寺、白山社、金剛寺、光福寺、

十六万五千六百坪」となつてているが、訂正した。

第11回 大図99号 伊勢原・荻野

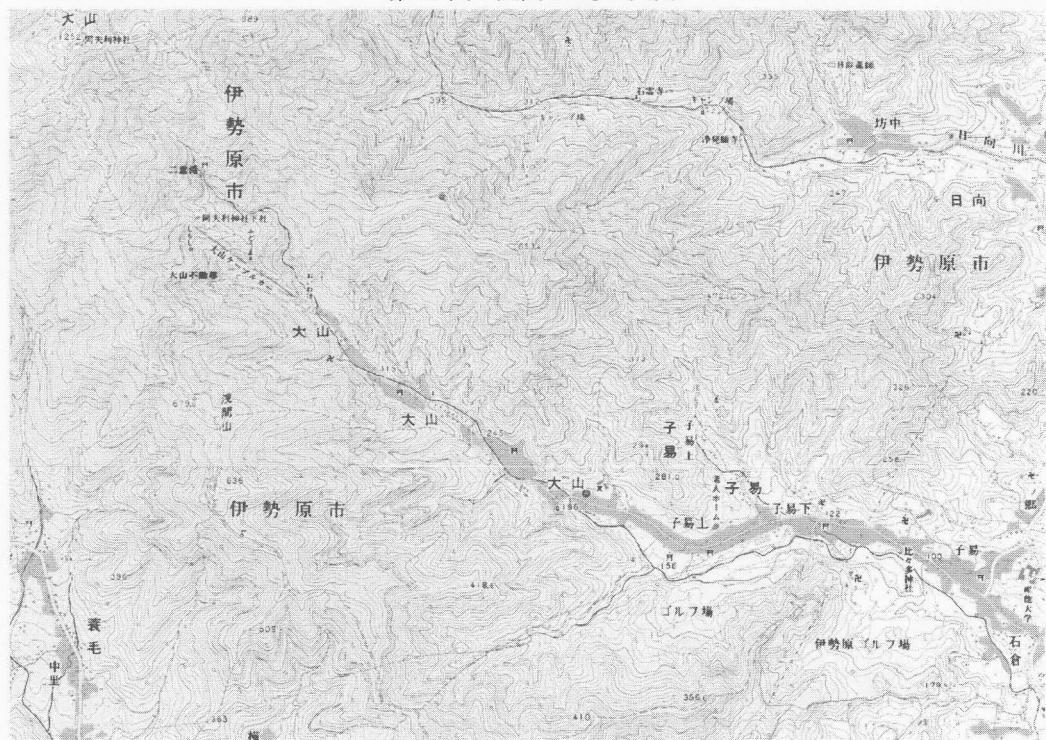




第12図 2万5千分1地形図 「伊勢原」の一部



第13図 大図99号 大山



第14図 2万5千分1地形図 「厚木」「伊勢原」「大山」「秦野」の一部

弘法寺、弥陀八幡宮と言った寺社が測量日記の中で名を連ねている。

これら描かれた図に対応しているのである。

荻野村は、下荻野村、中荻野村とあり、荻野山中という地名もある。下荻野村には○印が付いており、宿駅であり、伊能測量隊も止宿している。荻野山中は、小田原藩の支藩であり、当時の藩主は大久保出雲守教孝（のりたか）と言った。大図にも、大久保出雲守在所と記されている。この殿様は、藩主在任四九年に達し、大阪定番、奏者番を務めた。「養蚕要略」を刊行して養蚕の振興を図つたと言われている。^{*}

大山道

伊能忠敬本人の最後の測量となつた第八次九州第二次測量は、文化八年（一八二一年）一一月二五日に江戸を出立して、二八日に大山町に到着した。藤沢から田村（平塚市田村）、伊勢原村を経て、子安村を通り大山町に達している。大山への入口野上糟屋村子易には、比比多神社があり、祭神は、木花咲耶姫命で子易明神とも言われ安産の神様である。神木の櫛（なぎ）の木があり、伊勢原市の指定保存木となつている。創立は天平年間と伝えられ、現在の本殿は、享保二年（一七一七年）に再建されたものである。日記には、「此村（子安村）に子安地蔵、子安観音あり」と書かれ、また、子安村には、江川太郎左衛門代官所があると書かれているが、大図に子易観音の記載がある他は、その所在は分からぬ。

*[†]工藤寛正編「江戸時代全大名家事典」による。

大山町は、大山寺領、御朱印百五十七石と日記には記されており、

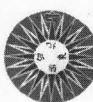
ろうべん

大山寺は、天平勝宝七年（七五五年）に東大寺の開山良弁が開いた古刹で雨降山大山寺と言い、大山不動とも言われる。本尊は、鉄造の不動明王で、国の重要文化財に指定されている。徳川家光が伽藍を整備し、春日局も家光の世継ぎになることを祈願して大山不動に祈つたそ

うである。江戸時代には、大山詣が盛んとなり江戸周辺の一大観光地となつていた。大山は江戸から近く、大山修験者から転じた御師が各地の大山講を手引きし、講中宿が賑わつたと言われている。^{*}大山は、大山寺と阿夫利神社の神仏習合の聖地であつたが、明治初年には廃仏毀釈の嵐が吹き荒れて伽藍や宝物の破壊が行われた。地形図に記載されている阿夫利神社下社の位置にかつては大山寺があつた。大図には、大山寺、不動堂と思われる図が描かれその背後には、阿夫利神社と書かれた山が描かれている。

掲載した伊能大図は、すべて国会図書館所蔵のものの一部であり、「伊能大図總覽」から引用した。地形図は、第6図が国土地理院の地形図の一部であり、その他は（財）日本地図センターの彩色地形図の一部を引用した。

（ほしの よしひさ・代表理事・（社）日本測量協会副会長）



「綾部のバカ息子」 麻田剛立の生家を訪ねて

河 島 悅 子

大分県杵築市に行く。松平三万一千石の城下町は、町屋を中心に両側の高台が武家屋敷で占められ、今も江戸期そのままの形態で残っていた。剛立生家跡が観光マップに載っていないので市立図書館に行く。若い女性職員に聞くと「知らない。この土地で麻田姓は聞かない」という。でもパソコンで調べてくれて厚い本を三冊出し、「自分で調べてください」とのたまう。「これでは麻田剛立が可哀想すぎる」と思わず声に出すと、「この前も大阪から調べに来た人が同じ言葉を云われ、大阪では麻田剛立といえば大人物なんですよ、知らないんですか」と、かなり大憤慨されていた」と届託ない。

話にならないので市役所観光課に行く。窓口の若い職員は奥の方に向かって、生家はどこかと尋ねてくれた。「旧庁舎」と答えが返り、観光マップに印をつけてくれた。



杵築市旧庁舎

数年前まで市役所だった敷地全部が生家跡で、杵築城下町博物館の学芸員が、やや詳しいと教えてくれる。太陽の高いうちに写真を撮りたいので旧庁舎を探すが不案内の土地なのでまごつく。地元の人と思われる老人に聞くと「空き家の旧庁舎に何の用事がある?」と問われ、麻田剛立の生家跡だからというと、しばらく考えていたが、「ああ、綾部のバカ息子のことだね。親父は偉い人だつたけどね」

医家時代の処方箋の切れ端に「肥満の人は酒、肴の膏、血、肉に入りて血塞る故に・・・(略)」漢方薬の処方が書いてある。断片で申し訳ないが「附子(トリカブト)・甘草・センナ□□□を用ふ」どうやら

云いつつ指差して教えてくれた。
三百坪程の敷地で隣がカトリック教会、武家屋敷をそのまま教会の門として使つていて楽しくなる。どの家も江戸時代にタイムスリップしたようなたずまい、中で侍が暮らしているのは・・・とすら思わせる。

博物館学芸員の話では、以前に麻田剛立展を開いたが不評だったという。

綾部家の子孫が持つている文書を中心

に、展示した内容を見せていただく。祖先由来書には、京の綾部より中世、大友氏に仕官、大友氏滅亡後、麻田郷で郷土暮らし、近世、松平氏に百石郡奉行職を得たこと。

享保大飢饉(一七三二年)の折、農民救済法で上層部と対立、職を辞し、綾部塾を開いたこと。

(註・享保大飢饉 享保十四年(一七二九)より連年の不作、十七年の大蝗害に薩摩、長崎を除く西国諸藩は領民の三分の一を病餓死させたという。)



杵築カトリック教会



江戸時代に反射望遠鏡で月を見て日本初の月面観測図を書いた男。独学で天文学を学び、日食を見事的中させ、ケプラーの第三法則を見つけていた。大坂にて文塾「先事館」を開き、日本の近代天文学の礎となつた麻田剛立の生涯を描く。

近刊紹介

(かわしま えつこ・「歴史街道を歩く会」代表)

◇『月のえくぼを見た男 麻田剛立』

くもん出版 二〇〇八年四月刊
鹿毛敏夫著・関屋敏隆画

郷里の人々にとつては麻田剛立は、天文暦学などという得体の知れぬ学問にはまり、藩主や先輩（三浦梅園）に後足で砂をかけて出て行つた男——国を捨てた「バカ息子」でしかなかつたのであろうか。

郷里の人々にとつては麻田剛立は、天文暦学などといふ得体の知れぬ学問にはまり、藩主や先輩（三浦梅園）に後足で砂をかけて出て行つた男——國を捨てた「バカ息子」でしかなかつたのであろうか。

下剤らしきものようだ。彼が藩主はきっと肥満に悩んでいたにちがいない。脱藩後、大阪に住んでいるところ分かったときも「捨ておけ」とい、長兄を百石で郡奉行に取立て、弟に送金するよう申し付けたと、兄嫁の証言が残つてゐるという。脱藩お手討ちの時代にである。



「綾部塾跡」・「麻田剛立生誕之地」

忠敬さん大健闘！！秀吉・家康抜いて第10位

(朝日新聞 6月28日朝)

◇『江戸の天文学者 星空を翔ける——幕府天文方、渋川春海から伊能忠敬まで』技術評論社 中村 士著

物はどんな業績を残したか。社会科の理解度を調べるために文科省が全国の小6生と中3生を対象に実施した調査の結果、伊能忠敬は正答率84・9%で第10位だった。正答率トップは「邪馬台国の女王になつた」卑弥呼で99%。わが忠敬先生は確固たる業績によって小中学生にも認知度が高かつた。

順位	人物	正答率(%)	順位	人物	正答率(%)	順位	人物	正答率(%)
1	卑弥呼	99.0	15	紫式部	80.4	29	北条時宗	63.6
2	ザビエル	97.7	16	鑑真	79.6	30	中大兄皇子	54.9
3	ペリー	95.1	17	徳川家康	79.4	31	中臣鎌足	54.1
4	野口英世	91.7	18	徳川家光	78.5	32	東郷平八郎	51.9
5	雪舟	90.1	19	清少納言	78.4	33	西郷隆盛	50.0
6	杉田玄白	89.6	20	藤原道長	77.9	34	板垣退助	47.3
7	福沢諭吉	88.8	21	行基	75.8	35	陸奥宗光	40.2
8	織田信長	87.1	22	歌川広重	72.8	36	伊藤博文	40.1
9	聖徳太子	86.2	23	本居宣長	72.3	37	勝海舟	38.2
10	伊能忠敬	84.9	24	聖武天皇	72.1	38	明治天皇	37.8
11	足利義満	84.3	25	近松門左衛門	72.0	39	小村寿太郎	33.8
12	足利義政	83.8	26	平清盛	65.0	40	大隈重信	28.7
13	小野妹子	82.1	27	源頼朝	64.8	41	木戸孝允	25.4
14	豊臣秀吉	81.5	28	源義経	64.0	42	大久保利通	23.5



観念的な陰陽道の宇宙觀から、科学としての天文学へ。渋川春海、高橋至時、伊能忠敬と、生涯をかけて宇宙の真理を探求し、天文に情熱を注いだ人たち。いつの時代も変わらない、星空へのロマン。

伊能陽子

日本人科學的

天材能力之徵證

大正十五年初夏

上杉慎吉

上杉 慎吉

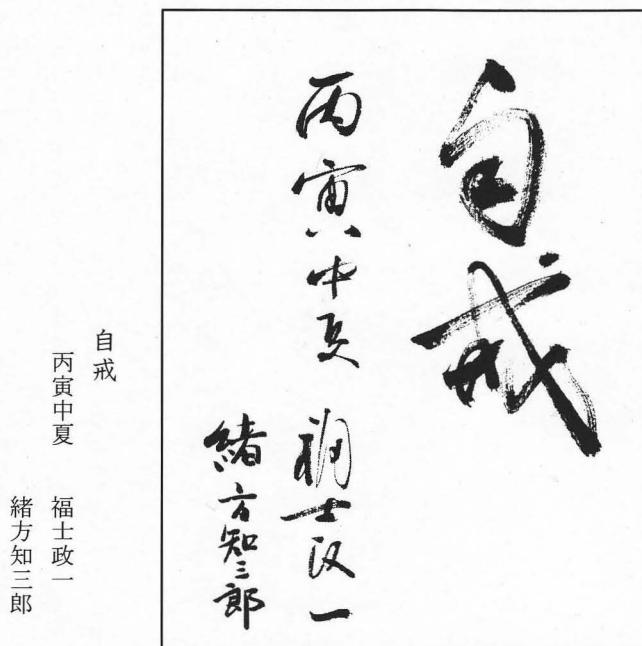
うえすぎ しんきち (一八七八~一九二一九)

憲法学者。福井県出身。東大教授。穂積八束の弟子で、極端な君權絶対主義を唱え、天皇機関説の美濃部達吉と激しく論争した。七生社、建国会など右翼団体の思想的支柱ともなった。主著「新稿帝国憲法」「新稿憲法述義」

(百科事典マイペディア)

日本人科學的
天材能力之徵證

大正十五年初夏
上杉慎吉



福士 政一

ふくし まさいち (一八七八~一九五六)

病理学者。日本医科大学、東大教授。山口県生まれ。刺青の収集でも知られ、著書「刺青」がある。

(日本著者名・人名典拠録他)

緒方知三郎

おがた ともさぶろう (一八八三~一九七三)

病理学者。東大教授。唾液腺内分泌、老化機構などを研究。共著「病理学総論」など。文化勲章。(広辞苑)

筆跡からみて、揮毫なさつたのは福士博士でしようか。日本病理学会の会長は昭和九年度が緒方知三郎氏で、昭和十二年度が福士政一氏です。丙寅・大正十五年、お二人とも四十代半ば位、研究仲間のご旅行中のお立寄りだったのででしょう。

(いのう ようこ・伊能忠敬研究会顧問)

伊能忠敬測量隊 東大寺の諸堂や宝物拝覧

佐久間達夫

高 三十石 観音寺領 同國同郡般若寺村之内。
高 二十八石余 三倉役人、八幡宮神人、並、公人等居屋敷。
右御代々御朱印別に頂戴。

坊舎学侶 十七ヶ院、堂方九ヶ院、律宗三ヶ院。

鎮守八幡宮 西向

大宮 南北十一間 東西二間半

幣殿 拝殿 御廊 樓門

若宮

拝殿 御廊 神樂所

末社數箇所 祭祠有之。

右天平勝宝元年十一月 依勅請自宇佐奉勅請。

宝藏 一字

十三重塔 聖武天皇御受戒後、御冠御衣等奉納之。

護摩堂 本尊 五大明王

右為長日御祈祷護摩供勸修之。

新造屋

八幡御本地堂 集会所 経藏

右長日御祈祷參籠所也。

法華堂 南正面 東西九間半 南北十四間余

本尊 不空羈索觀音 御長一丈二尺

脇士 梵天 帝釈 四天王等

右御代々御朱印頂戴

右天平五年 当寺最初御建立之堂也。

二月堂 東西十四間 南北十一間半

登廊十九間余

本尊 十一面觀音 秘仏

高 百石 右從往古領地。 防州佐波郡国衙之内。

真言院領

法蓮村之内。



御厨子 十一面觀音 秘仏

右天平勝宝四年開山良辨僧正弟子実忠和尚開基。毎年自二月朔日至十四日 二七夜御祈禱修法有之。

鎮守

飯道明神社 遠敷明神社 興成明神社

關伽井屋 佛餉屋

食堂並宿所

東西三間半 東西二間半 南北一間半

湯屋

東西三間余 南北十二間余

右二月堂一類八ヶ所、從公儀御修理被成下候。

開山良辨僧正影堂

三昧堂 本尊 阿弥陀如來

念佛堂 本尊 地藏菩薩

鐘樓 四間四面

鐘高 一丈三尺六寸 脊廻三丈 口徑九尺一寸三分
厚さ 八寸。

行基菩薩影堂

浴室

俊乗上人影堂

大仏殿

金銅 庫遮那仏 坐像 御長五丈三尺五寸

金銅 蓮華坐 五十六葉 高一丈 廻廿九間余

石坐 廿八角 高七尺 廻五十一間余

後光 高八丈三尺 橫七丈八尺

二脇士 左 如意輪觀音

右 虛空藏菩薩 坐像 御長各二丈五尺

堂間敷 東西廿八間六尺二寸 南北廿五間四尺三寸

高廿四間余。

金銅 八角大燈籠 一基 高一丈三尺

手水屋 一字

中門 東西十一間三尺余 南北三間六尺

二天王像 東 多聞天 西 持國天

廻廊 南面 東西七十七間三尺七寸 梁間三間

同東西側 五十五間

同東側 五十五間

東西登廊 各二十一間一尺

東西樂門 五間一尺余宛

後閉封彊 東西七十九間余

東側 四十間余 西側 四十間余

右大仏殿、元禄年中御再建被成下了。

講堂 三面僧坊 食堂 竪殿

東塔 西塔

右炎燒以來礎石也。

勸化所 号龍松院 本願 聖武天皇御殿

拝殿 但當時、東照宮御相殿也。

經藏

阿弥陀堂

鐘樓 庫裡 方丈等

東南院殿 境内 東西四十八間 南北百間余

東照宮並拝殿 御殿等

右寶曆三年燒失礎石也。

二荒權現社

經藏 一宇

三社宮

自此池託宣文出現也。

南大門

東西十四間四尺 南北五間三尺五寸

二王御長

各二丈六尺五寸

右正治元年六月建立。

真言院 又号南院

灌頂堂 地藏堂 神護殿 開伽井

戒壇院

受戒堂 千手觀音堂

右天平勝宝六年伝戒根本、鑑真和尚依勅建立。日本最初戒壇律宗

本處也。享保年中再建之。

三倉 又、号正倉院

御倉 南北十七間 梁間五間

聖武天皇御遺財奉納之。

鎮守藏王権現

右公儀御修理所

尊勝院

右永祿年中炎上、經藏一字相殘。

転害門 南北八間余 梁間四間

國分門 中之門 南門等、炎上後礎石。

御拌石

右准天竺祇園精舍例、聖武天皇入御東大寺之時、於此所拌大殿廬
遮那仏給。

寶物

十字額 金光明四天王護國之寺

額内 長五尺五寸 橫三尺七寸五分

四方に造、梵天 帝釈 四天王之像

仏舍利 婆羅門僧正将来 (持ち來たる)

二月堂 牛玉、並、朱宝板木

同 尊勝院羅尼板木

右寛文七年二月堂炎燒之時、火中相残。

須真天子経 三卷

聖武天皇宸翰 大愛道比丘尼経 二卷

聖武天皇御袈裟

賴朝卿御書

大仏殿古瓦

俊乗上人江御書

俊乗上人所持勸進柄杓

同 錚鼓

同 脇息

鑑真和尚将来仏舍利、金塔者、後嵯峨院御寄進也。

積迦三尊並十六羅漢 各幅

顏輝筆 各幅 牧溪筆

十六羅漢

右兩筆羅漢者、將軍、普広院義教公御寄附。御水尾法皇、東福門院
御所収覽之時、表具等御修補被為成下候。

已上

辰十二月

東大寺

年預 見性院
役者 北林院

●『第六次四国沿岸測量日記』佐久間達夫校訂

文化五年十二月七日 朝より晴天。五ツ前、壳曆師山村左門、中尾主膳千菓子持て見舞に出る。それより袴を着し、春日社拝謁（奉納の鎧甲三両を見る）水谷社（牛頭天皇）三笠山の麓を過、東大寺の八幡宮、三月堂、二月堂、四月堂、鐘樓大鐘（南都次郎という）大仏殿大仏、東大寺勸進所龍松院にて宝物拝観。開壇堂（戒壇堂）を拝し、興福寺の中院屋にて宝物拝観。（両寺宝物別に記す）食堂、東金堂、五重塔、南園堂、北園堂を拝し、九ツ頃帰宿（南都・池田屋庄左衛門宅）此夜曇天。

家族四人で、昭和四十五年（一九七〇）に大阪で開催された「万國博覽会」を見学しての帰路、京都・奈良の名所旧跡を散策した。奈良の三笠温泉で一泊し、次の日、奈良の大仏を見たとき、子供たちが、「大きいなあ」と言つた言葉が今でも忘れられない。

南都であった奈良には、東大寺、法隆寺、興福寺、春日大社など、たくさんの神社寺院があり、そこには国宝や国の重要文化財に指定されている建築物や仏像などが建立され、安置されている。それも太平洋戦争での本土爆撃から免れて、建設当時の姿をそのままに残し、伊能忠敬が記録した『大和国寺社靈宝錄』のなかに記述されている寺社も数多く存在している。

「奈良七重、七堂伽藍、八重桜」と歌われている奈良を、忠敬の測量経路に沿つて、ゆっくりと散策することもよいと思う。

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）

◆第8回「地図力検定試験」より◆

うだためし

問題 伊能図の利用について述べた文のうち適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 明治政府が輯製（輯成）二十万分の一図などの編集に使用した。
② 外国船打ち払いのため、海岸部に領地を持つ大名に配られた。
③ 日米和親条約により提供を受けたペリー提督が日本沿岸の海図作成に使用した。
④ 長崎奉行からオランダ商館の医師シーボルトに与えられ、ヨーロッパで日本全図が作られた。

解説 江戸幕府は、伊能図を幕府内にとどめておき、原則として外部に出することはありませんでした。シーボルトが伊能図（小図）を入手したのは、伊能忠敬の師である高橋景保からです。シーボルトは国禁のこの図を国外に持ち出そうとして発覚してしまいます（シーボルト事件）。しかし、彼は、写図を持ち出すことに成功し、これを編集した日本全図が後にヨーロッパで刊行されました。幕府から伊能小図の提供を受けたのは、イギリス人の測量艦隊です。この図が正確であることから、艦隊は日本沿岸の測量を中止しています。イギリス海軍水路部はこれを編集して日本近海の海図を改訂しました。伊能図を引き継いだ明治政府は、各種の地図の作成にこれを大いに活用しました。答①（財）日本地図センター「月刊JMJニュース」より）

『伊能忠敬測量日記』に見る地震

辻 本 元 博

はじめに

佐久間達夫校注『伊能忠敬測量日記』記載の地震の記述について、今後の地震予知や地層判断史料、その他郷土史の史料等々に役立つものと思い、他の地震史料との照合を試みた。本年三月十八日大阪で開催の某会合での外部講師としての講演で初めて若干触れたが、本稿で詳述する。尚、照合資料は左記の三点である。本稿はこれら照合資料には無い初見かと思われる地震を含め、記録の間隙を補う結果となつた。

- A.『日本の歴史地震史料拾遺』、同拾遺一、同拾遺三 宇佐美龍夫編
- B.『日本被害地震年表』日本地震学会ホームページ
- C.『地震噴火災害全史』災害情報センター・日外アソシエーツ編

日外アソシエーツ・(株) 紀伊国屋書店

照合結果の概要

下記(1)の蝦夷勇払での地震及び(3)の房総半島岡本村での地震はA、B、Cいずれにも記述の無い初見の地震である。他はA、B、Cの記述を補足する結果となつた。(2)の三浦半島の上宮田での地震は江戸でも大地震で、上総の久留里ではお城の堀が崩れ民家が倒れる被害を出した大地震である。また(4)の薩摩半島の山川湊での地震は九州の南北に及ぶ規模の大きな地震であることが初めて判明した。いずれも大きな地震ではあるが、被害が甚大な巨大地震でもなさそうに思われる。以下年代順に述べる。

各地震別の照合内容と所見

(1) 蝦夷ユウブツ(ニ勇払 現苦小牧市)での地震

『測量日記』記述「寛政十二年六月二十二日(一八〇〇年八月十二日)朝 晴、五つ後地震

それより薄曇、七つ頃より中晴、夜も同じ」 蝦夷ユウブツ

資料A、B、Cに記述が無く初見の地震と思われる。

(2)三浦半島上宮田(現三浦市)での地震

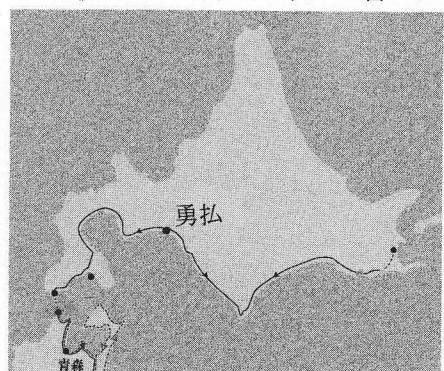
『測量日記』記述「寛政十三年(享和元年)四月十五日(一八〇一年五月二七日)朝七つ半頃大地震

上宮田村(三浦市) 止宿 名主 丹蔵 六ツ後出立」

(尚、『測量日記』中の寛政十三年は改元で享和元年になるので併記した。)

資料Aの拾遺一、拾遺三に江戸での地震記録が有り、資料B及び資料Cにも記述がある。

この地震は大きな地震にある特徴であろうか、前後の江戸での有感地震の記録から取れば資料記述は資料A『日本の歴史地震史料』拾遺の享和元年四月十日(五月二十二日)の『浅草寺日記』及び常陸(茨城県)鹿島に於ける『日記』から始まり資料A『日本の歴史地震史料』拾遺に掲載の四十二日目の『萩原家日記』の江戸享和元年五月二十三日(一八〇一年七月三日)以降なくなる一連の群発地震の記録を伴っている。尚、資料A『日本の歴史地震史料』拾遺の鹿島の『日記』に



(1) 蝦夷勇払における地震 (1800. 8. 12)

は著者及び所蔵先等の詳細記述は無い。

①四月十五日の地震に付いては資料A『日本の歴史地震史料』の同拾遺二で江戸の『浅草寺日記』、同拾遺三で江戸の『萩原家日記』(萩原家文書)、『中井家日記』(播磨屋中井家文書)、『内桜田日記』(館林藩家中福井家文書)に記録されている。以下時系列を試みた。

四月十日（一八〇一年五月二十二日）

江戸 八過雷同刻地震

常陸鹿島 八時頃大地震在之近年覚不申候大地震也

四月十一日（五月二十三日）常陸鹿島 夜中地震昨日同し

四月十四日（五月二十六日）

江戸 未下刻此地志ん夜中地震凡十七八度

『浅草寺日記』
※
『萩原家日記』
為
空欄

内一度明ケ七ツ半頃至て強

江戸 今夜八ツ半過より六ツ前迄地震大小七ヶ度震申候『中井家日記』

四月十五日（五月二十七日）

江戸 巳刻頃より地震少々づつ、度々有之

江戸 夜中も度々地志ん有之

江戸 昼九ツ過ぎニ地震有之候

江戸 度々地震ニ付御小人目付見廻り有之

江戸 今晩度々地震ニ付為見廻

江戸 昨夜中より度々地震

江戸 昼後より・度々地震『萩原家日記』

江戸 上官田 午後此地志ん

江戸 未刻過地震

江戸 午刻過地震

江戸 巳刻過地震

『萩原家日記』

（疑問点）B『日本被害地震年表』（日本地震学会ホームページ）とC

五月十三日（六月二十三日）江戸 未刻此少地志ん・申中刻地震

『萩原家日記』

五月十六日（六月二十六日）江戸

未刻前地志ん 『萩原家日記』

五月二十三日（七月三日）江戸

子刻過此地震 『萩原家日記』

②資料B『日本被害地震年表』（日本地震学会ホームページ）

「享和元年四月十五日（一八〇一年五月二十七日）」の地震は上の記述との対比。

「享和元年四月十五日（一八〇一年五月二十七日）」とあり、これは現君津市久留里付近になる。

総久留里城の堀など破損、民家の潰れるもの多かつた。江戸での有感。震央は北緯三十五・三度、東経百四十・一度

（③資料C『地震噴火災害全史』（災害情報センター）に「享和元年（一八〇一年五月二十六日）上総地方で地震があった。マグニチュード六・五。久留里城内の堀などが破損、民家が多数倒壊した。」との記述あり。）



(2)上官田における地震 (1801.5.27)

(3)岡本村における地震 (1801.8.9)

『地震噴火災害全史』（災害情報センター）とではどうしたことか、月日が一日異なるが、私見を後述する。

④伊能測量隊の行程

江戸での地震記録の日と伊能測量隊の行程を辿る。日中の測量隊は屋外作業が続くが四月十五日以外も通過地点では有感の地震が続いていたのではなかろうか。

四月十日（一八〇一年五月二十二日）には伊能忠敬測量隊は町屋村（横浜市）を出立し現在の金沢八景方面を浦郷村（横須賀市）へ向かっている。

四月十一日（一八〇一年五月二十三日）浦郷村を出立し横須賀村泊

四月十四日西浦賀出立し上宮田村（三浦市）泊

四月十五日（一八〇一年五月二十七日）朝七つ半頃大地震 上宮田村

（三浦市）止宿 名主 丹蔵 六ツ後出立 三崎町泊

資料 B 資料 C の久留里の地震と考えられる。〔萩原家日記〕では四月十四日（五月二十六日）に「内一度明ケ七ツ半頃至て強」とあるが、測量日記の記述と照合する限りでは資料 C も含めこれは四月十五日（一八〇一年五月二十七日）の朝の七つ半（不定時法では午前四時頃であろうか）と捉えるべきが妥当といえる。

四月十六日（下宮田村泊）、十九日（佐島村泊）、二十一日（江ノ島泊）、二十六日伊能測量隊は一路相模湾岸を吉浜村から熱海に向かって西へ。

五月一日（熱海滯在）、十三日、十六日（下田滯在）、二十三日（田子村滯在）。江戸では余震が続くが、五月二十三日には伊能測量隊は伊豆半島西岸の井田子村に逗留中である。

（3）房総半島岡本村（南房総市富浦町）での地震

『測量日記』の記述「寛政十三年（享和元年）七月朔日（一八〇一年八月九日）岡本村朝六ツ二・三分頃 大地震 此日晴曇 止宿淨土宗金池山西方寺 六ツ半後出立 夜晴（夜は那古村）」この地震については資料 A、B、C いずれにも記述が無く初見の地震であろうか。

（4）薩摩半島山川湊での地震

『測量日記』の記述「文化九年三月二十日（一八一二年五月一日）此夜七つ半頃 大地震山川湊（鹿児島県山川町）止宿 助市（逗留中）朝より雨、南風、或は止、又雨」

A 「日本の歴史地震史料」拾遺二の同日の肥前武雄（佐賀県武雄市）の記録 『武雄鍋島家文書 御日記草書』

「小雨四過より雨八より雨強七半より雨・夜雨五より曇九より薄晴

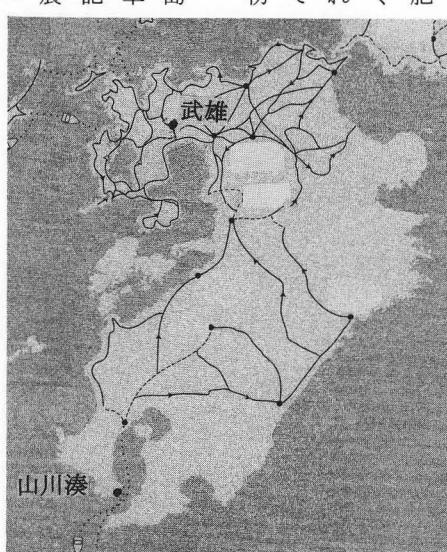
曇七半地震強七半過より曇」

この地震は強く揺れた九州南端の薩摩半島山川から直線距離で約二百

二十七キロ離れた九州北部の肥前武雄でも全く

同時に強く揺れ大きな地震であったことが初めて判明した。

『武雄鍋島家文書御日記草書』は前後の記録を辿ると地震の揺れ方のレベ



（4）山川湊における地震（1812. 5. 1）

ルを「強」・「中位」・「軽」に分けて記録しており、他に「不軽」カル

カラズ・「幽」カスカという表現もある。

震の記録は他に無いか。

偶然気付いたこと

武雄から比較的近くの佐賀では文化九年三月十日（一八一二年四月二十一日）晴夜五ツ時比大地震の記述が有る。（『神代鍋島家文書』十九三七十七）（A『日本の歴史地震史料』拾遺二より）一方、B『日本被害地震年表』（日本地震学会ホームページ）には文化九年三月十日（一八一二年四月二十一日）は土佐（高知県）高知でも土蔵が崩れる地震が記載されている。震央は北緯三十三・五度、東経百三十三・五度（地図を見ると概略土佐湾須崎沖になる）。

C『地震噴火災害全史』（災害情報センター編）でも「一八一二年（文化九年）四月二十一日四国地方、中国地方四月二十一日土佐で地震があった。マグニチュード六・九 土佐、因幡（鳥取県）でも強く感じた」とある。（もし佐賀と高知の地震の時刻が同時刻なら同一の地震である可能性が出てくる。九州地方では文化九年三月十日と二十日と続けて大きな地震が有つたことになる。）ところで、この日文化九年三月十日（一八一二年四月二十一日）の伊能測量隊は九ツ頃（真昼の九ツか）鹿児島止宿の呉服町会所から屋久島行きの荷物を積み込んだ船へ乗船し、山川湊を目指そうとするが南風（鹿児島から南の山川湊へは逆風）で船中泊。同日の『伊能忠敬測量日記』に地震の記述が無いが、鹿児島では有感ではなかったのか、それとも乗船済みの為、波に揺られていたのであろうか。

（5）今後の解明すべき課題

1. 寛政十二年六月二十二日（一八〇〇年八月十二日） 蝦夷・勇払の地

2. 寛政十三年（享和元年）七月朔日（一八〇一年八月九日）岡本村（南房総市富浦町）朝六ツ二・三分頃 大地震の地震記録は他に無いか。
3. 上宮田での地震とその前後の関東での地震と房総の岡本村での地震との関連性の有無。

4. 文化九年三月二十日（一八一二年五月一日）山川湊・武雄で共通の大震の震央はどこになるのか、震央が不明である。

5. 伊能忠敬には直接関係は無いが文化九年三月十日（一八一二年四月二十一日）の高知、佐賀、因幡での各大地震は同一時刻のものであろうか。三月二十日の山川湊で遭遇の地震と同様に鹿児島近辺の陸上では有感地震であったのか。

6. 文化九年三月十日の佐賀、高知、因幡の地震と三月二十日の山川湊、武雄の両地震の関連性の有無。

（6）閑話休題

ところで、今回の中国の四川省の地震の現地では地震の前に墓蛙が一斉に移動したとの話がインターネットで流れていると伝えられる。

二〇〇七年三月二十五日の能登半島沖地震の前夜、佐渡島小木での調査行で墓蛙が二十匹ぐらいであつたろうか、道路を横断しているのに出くわした。民宿で聞くと、「雨も降つたし、墓蛙の出始めでしょう」とのことであった。冬眠明け頃の墓蛙は雨の夜に群れを為して移動する習性があるのでしようか。それとも能登半島の地震と関係があるのでしようか。どなたかご存知の方はご意見をお寄せください。

（つじもと もとひろ・日本国際地図学会会員）

研究レポート『伊能忠敬』(三)

伊能忠敬の測量と私の実験

石 谷 春 香

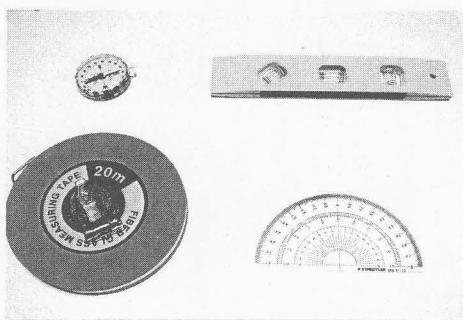
第四章 伊能忠敬の測量と私の実験 (つづき)

四 地図の作成

伊能忠敬のように実際に測量して地図を作つてみます。広い地図を作るのは大変なので、私が小学校のときにかよつていた学校の地図を作ります。

《用意する物》

水平器 分度器 画用紙
方位磁石 (コンパス) 卷尺



井田小学校正門

私の通つていた
井田小学校は、だい
たい四角形です。

私の家に近い角の
所から測量します。

初めて角から学校が
どのくらい北の方向
からずれているかを
測ります。

学校にそつて画用紙を置き、
方位磁石を使って角度を測ります。
(図1)・・・①

次に西門まで卷尺で測量します。
(図2)・・・②

西門の幅を測量します。
西門から角まで測量・・・③
角で学校の角度を測ります。
(図3)・・角度B

角から正門まで (④) と、
正門の幅 (⑤) と正門

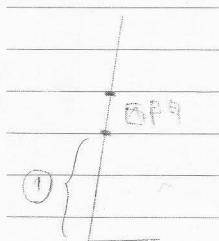


図2

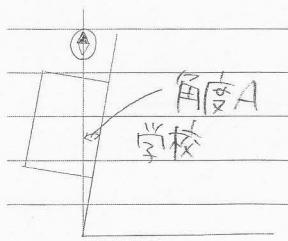
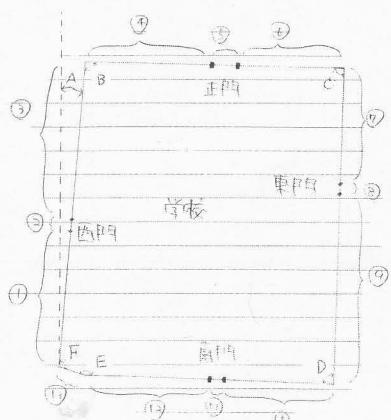


図1



全体図

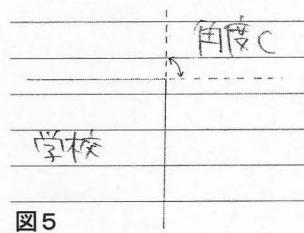


図5

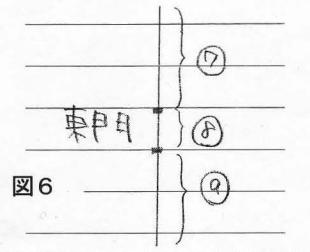


図6

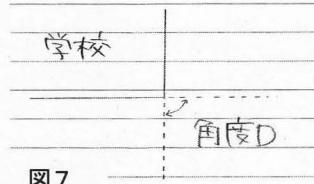


図7

角から角まで (6)
を測量 (図4)
角のところの角
度を測量 (図5)
・ 角度C

角から東門まで
(7) と、
東門の幅 (8) と、
東門から角までを
測量 (図6)

角のところの角度を測量 (図7) · · · 角度D

角から南門まで (10) と、南門の幅 (11) と南門から角まで (12) 、

角から角まで (6)
を測量 (図4)

図3

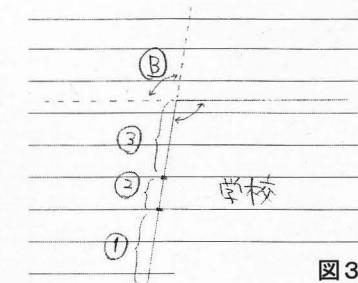


図4

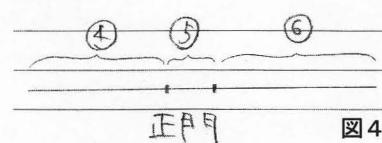


図4

二か所の交わっているところの
角度E・角度Fを測量 (図8)
ことで小学校を一周した
ことになります。

角から角まで (13) を測量。

【測量の結果】

<距離>		<角度>	
1	5,893 cm	A	5°
2	495 cm	B	93°
3	6,670 cm	C	90°
4	5,385 cm	D	90°
5	990 cm	E	163°
6	4,464 cm	F	102°
7	4,935 cm		
8	365 cm		
9	8,066 cm		
10	4,597 cm		
11	503 cm		
12	5,286 cm		
13	1,083 cm		

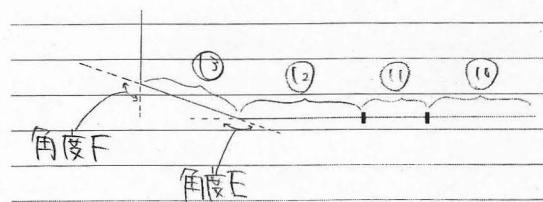


図8

次に測量の結果をもとに地図を作ります。

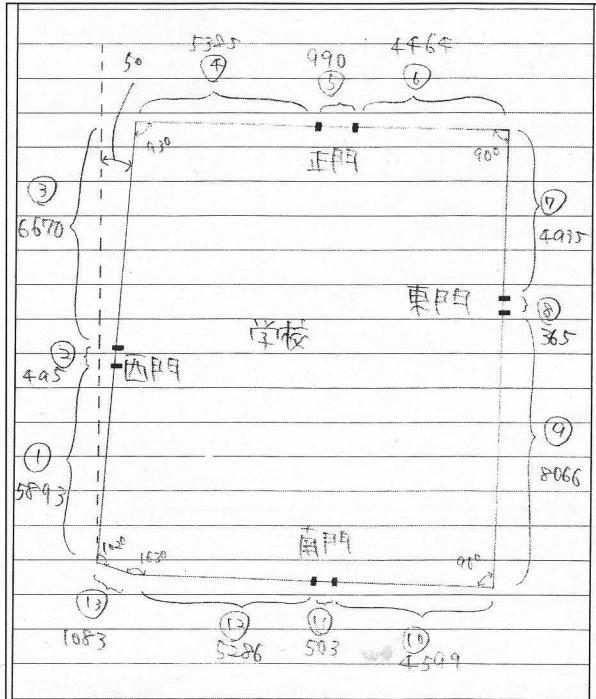
実際の距離の三〇mが地図上で二八・五cmの地図を作ります。
実際の測量の結果を地図上の距離に直します。

【地図上の距離】

＜距離の計算＞

- 1 $5,893 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 55.9835 \text{ cm}$
- 2 $495 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 4.7025 \text{ cm}$
- 3 $6,670 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 63.365 \text{ cm}$
- 4 $5,385 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 51.1575 \text{ cm}$
- 5 $990 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 9.405 \text{ cm}$
- 6 $4,464 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 42.405 \text{ cm}$
- 7 $4,935 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 46.8825 \text{ cm}$
- 8 $365 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 3.4675 \text{ cm}$
- 9 $8,066 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 76.627 \text{ cm}$
- 10 $4,597 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 43.6715 \text{ cm}$
- 11 $503 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 4.7785 \text{ cm}$
- 12 $5,286 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 50.217 \text{ cm}$
- 13 $1,083 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 10.2885 \text{ cm}$

【私が作った地図の下書き】



角度は地図上でも同じものです。

そして作つたのが次の地図です。地図で比較すると、ほとんど同じです。

地図と私の地図を重ねてみました。
すると、ずれているのです。
なんでしょう？

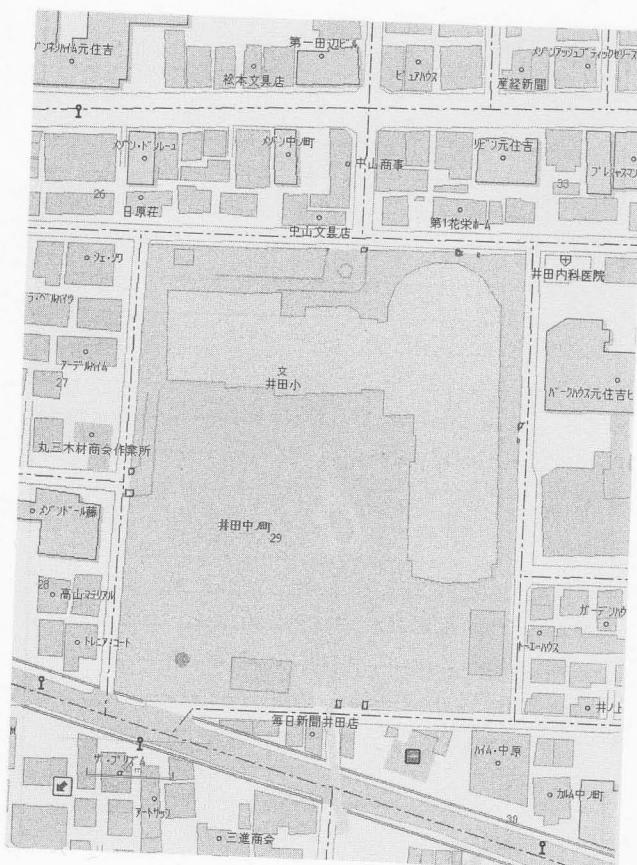
つまり最初に測ったスタートの地点を合わせて紙をずらすと、ぴったり一致します。

測量はほんの少しのずれでも、ほかのところに大きく影響してしまいます。やはり難しいです。



つまり最初に測った角度Aがずれていたのです。それから門もずれています。しかし私は実際に巻き尺で正確に測量したので、門の位置は私のほうが正確だと思います。

完成した私の測量による地図



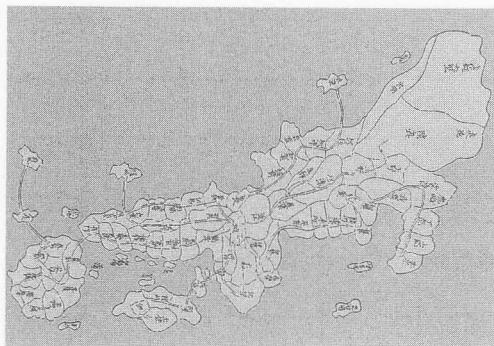
インターネットのgoo 地図

第五章 伊能忠敬の地図

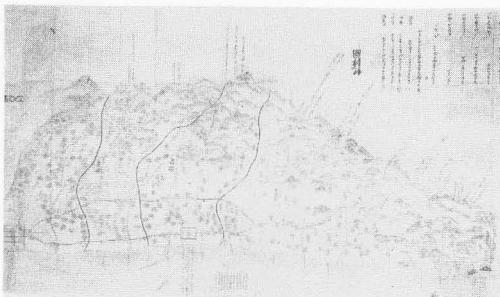
一 それまでの日本地図

日本最古の地図は行基という僧が一二〇〇年ほど前にえがいた「行基図」です。それぞれの国の形をならべて地図にしたもので

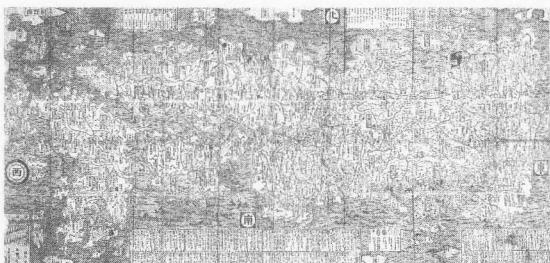
江戸時代には測量の技術はかなり進んできました。藩の大名は農民から年貢をとりたてるためにも領地の田畠をきちんと測量しなければなりません。幕府もそれぞれの大名の土地の大きさや地名などを知っておく必要がありました。そこで幕府はそれぞれの藩の情報をえるために四回にわたって国絵図を作らせました。縮尺は一里（約四km）を六寸（約一八cm）でえがくようにきめました。このように縮尺をきめ



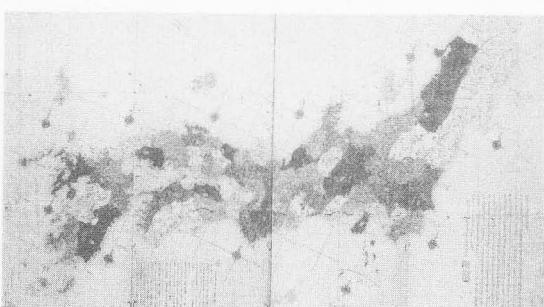
行基図



正保国絵図



「大日本国絵図」(流宣図)

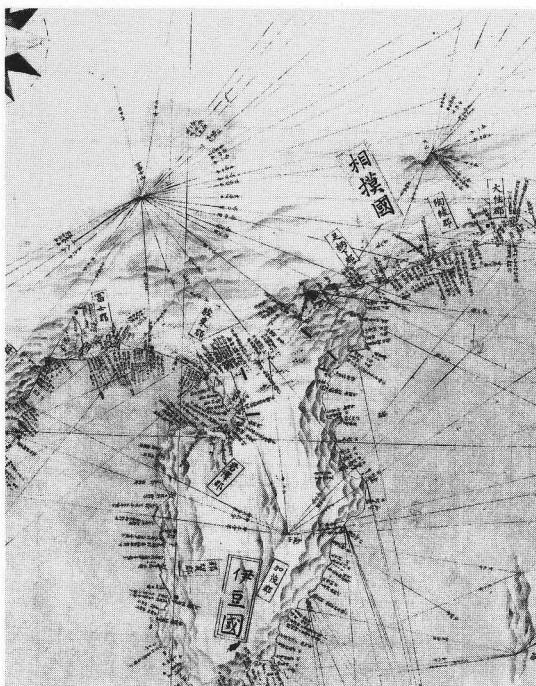


「改正日本輿地路程全図」(赤水図)

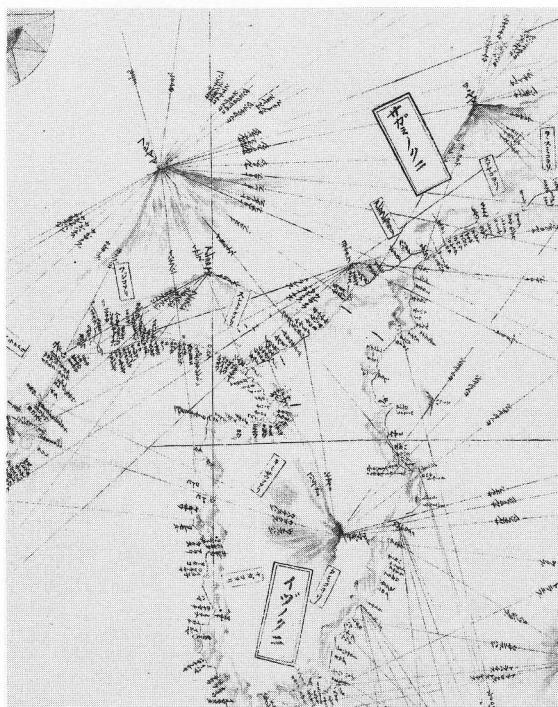
てつくられた地図を、当時は分間図（ぶんけんず）とよんでいました。一六四四年（正保元年）幕府は日本全国の藩に命じて国絵図を提出させました。「正保国絵図」が完成したのはそれから一〇年後のことです。江戸時代を代表する浮世絵師の石川流宣も「大日本国絵図」をえがきました。一七九九年（安永八年）長久保赤水が「改正日本輿地路程全図」をつくりました。この地図には緯度と経度の線がえがかれています。国絵図をはじめさまざまな地図をみて作りましたが全国に渡つて測量してつくった実測図ではありません。伊能忠敬が測量をはじめる二〇年ほど前の地図です。

二 伊能図

長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」がつくられてから四二年後の「八二一年（文政四年）に伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」が完成しました。これは大図二四枚、中図八枚、小図三枚からなります。それぞれの地図の縦の長さが約一七〇cmもあるので、北から南まで七mもの巨大な地図になります。伊能図は今の日本地図とほとんどかわりがないほど正確なものです。地図は国指定の重要文化財になっています。大図の縮尺は三六〇〇〇分の一、中図は大図の六分の一で縮尺は二一六〇〇〇分の一、小図は中図の二分の一で縮尺は四三三一〇〇〇分の一です。幕府に届けられた伊能図は「正本」とよばれていますが、



伊能図（伊豆）



カナ書き伊能図（伊豆）

残念なことにこれらはすべて失われてしまっています。伊能家のひかえの地図は「副本」とよばれています。江戸時代に手書きで複製されたものは「写本」というように区別されています。このため同じ伊能図でもさまざまな種類に地図があることになります。それから伊能図には奄美大島や沖縄は測量していないのでのつていません。同じ場所の伊能図でもいろいろなものがあります。色が違っていたり、地名を漢字やカタカナで書いたものがあります。

三 地図の作り方

①測量した記録はその日のうちに野帳という帳面にきちんと整理します。そのとき二人で測つた距離や方向に違いがあればその平均をとりました。坂の距離は「割円八線対数表」を使って地図で表わす距離に修正します。

②野帳の記録をもとに下図を作ります。下図では一〇町(一〇九一m)に対して一寸(約三cm)の割合で縮小し、記録どおりの方角の角度で測線をひきます。下図はそのまま大図の大きさです。

③つぎに天体観測の結果をもとに、さらに測線を正確にしていきますが、そのままでは大きすぎるので中図でどの大きさに縮小して必要な修正をおこないます。

④下図が完成したら、下図を地図にする用紙の上において測線の折れるとこころ(梵天を立てた地点)に針をさして小さな穴をあけます。何枚か重ねておいて同時に針穴をつけておきます。地図用紙の針穴を朱



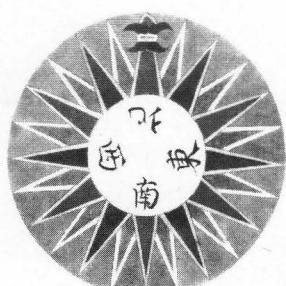
伊能図の地図記号

四 伊能図の地図記号

伊能図には「地図合印」(あいじるし)という地図の記号がついているものがあります。国名、郡界、駅町、港、方位線、海と川、郡名、城、神社、道路、天体観測地、田や畑、国境、陣屋、寺、緯度や経度、山の木、砂浜などの記号があります。☆印は伊能隊が天体観測をした場所です。伊能図の地図の位置を合わせるために「コンパスローズ」といわれる接合記号もあります。

五 「くらしと測量・地図」展

六月三日は測量の日です。「測量法」が昭和二十四年三月三日に制定されたことによります。六月五日から三日間、新宿で「くらしと測量・地図」展が開かれたので見学に行きました。場所は新宿駅西口広場イベントコーナーです。夜六時ご



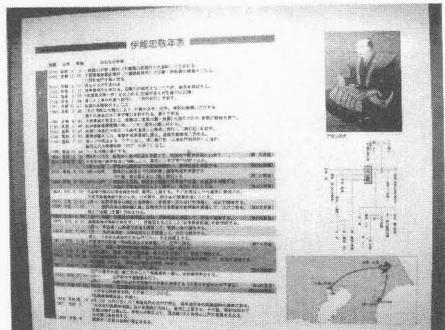
コンパスローズ

色の墨で線をひきつないでいくと測線だけの地図になります。重ねた紙も針穴をたどれば同じ地図が何枚かつくれます。

⑤測量した現地でスケッチした「あら繪図」という風景画をもとに、海岸の様子、野山などの風景、建造物などの絵を美しく書きこみます。また現地で調べた地名も書きされます。

⑥地図の記号を決めて小さな印をつくり、それらを所在地にそれを押します。「地図合印」といいます。

⑦地形がくわしく測量できなかつたところは測線が切れています。そこには「測量できず」と記入しました。



上：伊能忠敬の年表 下：測量機械



ろ行きましたが、JR新宿駅はものすごい人です。改札を出て少しいくと会場があります。入口のところでパンフレットが入っている青い袋をもらいました。中を見るといろいろなパンフレットや立体に見える地図などが入っていました。奥に行くと床に伊能図がありました。伊能図の上にとうめいのビニールがひかれてるので歩くことができました。とても大きな地図です。関東地方が展示されていました。見学している人もたくさんいました。鎌倉の八幡宮や伊能忠敬が測量をスタートした富岡八幡宮もありました。壁には伊能忠敬の年表や測量機械が書かれています。それから立体に見える大きな地図も伊能図のように床にありました。青と赤のメガネをかけて見ると富士山などが立体に見えます。測量に使う機械もあります。望遠鏡のようなものを見せてもらいました。中を見ると遠くのものがよく見えます。そして、

そこにいた人が親切に教えてくれました。その機械は遠くのものを見るだけでなく、レーダーでその距離と角度を知ることができます。実際に遠くにある柱までの距離をかんたんにしることができます。測量の機械のパンフレットと記念品をもらいました。帰りにアンケートをしたら日本地図のパズルがもらいました。新宿駅は本当にすごい人です。

六 変化する日本

伊能図ができる二〇〇年前と、今の日本の地形や海岸線とではずいぶん変わったところがあります。秋田県の象潟では地震によって入り江が隆起して陸地になってしまったり、鹿児島県の桜島は一九一四年（大正三年）の大噴火でつもつた溶岩で大隅半島と地続きとなりました。東京湾では埋め立てがすんで、忠敬が測量したこととまるで違った海岸線となってしまいました。お台場にある、東京みなと館で埋め立ての様子を知ることができます。伊能図は二〇〇年前の日本列島のようすを伝えてくれる貴重な資料です。

（いしや はるか・文教大学付属中学校三年）



現代の測量機械

伊能忠敬と米沢街道（二）

松 宮 輝 明

伊能忠敬と大塩村の塩井

旧暦七月二日塩川を六ツ後（午前六時）に出立し、下小出村、上利根川村、宮の目村、中ノ目村（塩川村）。舞田村熊倉宿に五ツ半（午前九時）着、天気が良くなる。四ツ頃（午前一〇時）に立つ。出口に大塩川あり。昼休み（昼食）、高柳村、館村、関谷村（塩川村）、樟村（北塩原村）を通り八ツ前（午後二時）大塩村に着いた。止宿は穴沢源吉

と云う芦名一族の係累で旧家なり。谷合に沸井戸があり釜六、七ツで塩を作る家があり。塩師の話では一釜に塩水二石（二石は約一八〇リットル）を入れ、五釜に一〇石（一八〇リットル）の水を入れると塩五斗（九〇リットル）が得られると云う。大塩村は石高千石斗。家百五十軒余。郡役所の物書き服部善内見回りに来る。翌朝も同じく見舞いに来る。大塩入口に亀甲坂と云あり。左右石亀甲なり。伊能忠敬は大塩村で産出する山塩について『その塩は甚白く味は甘酸である。塩は会津侯の用意で売買はせず。』と記している。

北塩原村商工会の経営指導員・須藤仁一氏に大塩村を案内して頂いた。『本村の大塩温泉から湧き出す塩井より塩水を汲み上げ塩を取つておりました。現在は村起こし事業として温泉水を煮詰め山塩を作つております。温泉は現在五軒あり、温泉水は塩分を含んでおり赤い色をしております。四〇度を越える温水です。穴沢源吉の子孫の方は源七氏でその長男が健史氏と思われます。訪ねてみて下さい。』と住宅地図を用意して下さった。検断穴沢源吉宅は高橋橋の麓にあつた。伊能忠敬が泊まつたことを話すと健史氏は「初めて知りました。大変名誉な

ことです。塩は第二次大戦中まで取つっていました。子供の時の記憶ですが、自宅の前を流れる大塩川に塩井があり、ここから湧き出す塩水を煮詰め塩作りをしていたことを覚えております」と来訪を歓待して下さいました。

文化六年（一八〇九）の『新編会津風土記』による

と、「穴沢源吉、この村の検断にて中島美濃某が後なり系図によるに美濃は其の先

鎌倉幕府和田義盛の出、建

保年中新左衛門常盛が子幸

若三歳になるを乳母抱いて家難をさけ、会津に來り成長して中島鞘負義仲と称し、大塩村の地頭となる。美濃は其八世の孫なりとぞ、子なかりしゆえ檜原の穴沢加賀信徳五男左馬信清と言うものを養子とす。左馬後の源左衛門貞利と称し伊達氏ここを襲いし時穴沢等と力を合わせ防守す、此ほどり其遺從多し、檜原村の條下を參見すべし、芦名氏滅て後源左衛門上杉氏に仕え氏を穴沢と称す源吉貞英に至るまで九代なりと言う。』と記している。伊能忠敬は房総九十九里の生まれである。海の塩と山の塩を比べ興味を持ち丹念に調べ味わつたのである。筆者も大塩村の甘みのある山塩を口に含みながら遠い昔にタイムスリップした。



穴沢氏一族の墓（桧原五輪の塔）

『新編会津風土記』の大塩村の塩井

『新編会津風土記』に「村中に塩井あり。故名けりと云、府城の北に当たり行程六里 家数八十八軒、東西六町 南北三十五間 大塩川を鉄み山間にあり、米沢街道駅所にて村中に官より命じられるる捷條目の制札（高札場）あり、塩井二 村中大塩川の北大橋の東西にあり、東ノ井筒周一丈三尺（約三・九メートル）、西ノ井筒周一丈五尺（約四・六メートル）、共に井戸の深一丈（約三メートル）余、梁盆塩井の類なり、相伝で弘仁三年（八一二年）空海この村に来て老婆の家に宿し、塩の欠きを患うを見て、これが為に護摩を修すること十七日、塩水岩中より湧き出すと言う、今も塩を焼いて生業とするものあり。西行が詠めるなりとて二首の歌を伝ふ。

海士もなく 浦ならずして 陸奥の山かつのくむ大塩のさと
浦遠きこの山里に いつよりかたえず今まで 塩やみちのく」

江戸中期の地理学者古川古松軒も天明八年（一七八八）幕府の公の巡見役に随行して、出羽・陸奥及び松前・蝦夷地の境まで視察して見聞録『東遊雑記』を書き表した。古松軒は大塩村の所在を詳しく説明し、自分が立ち寄れなかつたことを残念がつている。太田蜀山人は『半日間和』で、この塩は珍しく貴重なもので会津守護から幕府に献上されたと述べている。『新編会津風土記』には老婆屋敷跡について、「村中大橋の南側にあり、農夫ここに居る。この家に空海成り雛が像を安置、手が像は空海の作という。また、村西一町、米沢街道の側には、空海の腰掛石もあると伝えられる。亀甲坂は村より未申の方五町にあり、米沢に通る会合街道なり、此地一町余の中に石理折れ亀甲のごとき文をなすもの多いし故名付けし言う。」と記している。大塩川に

ついて「上流を小塩川と言う、檜原村の境内より来り、北より南に注ぎ西に折れ村中を経て未申の方に流れる事凡二里二十町計、上川前

村の南をすぎ樟村の界に入る。怪石きそい秀で水勢端急なり。」と記している。大塩宿検断穴沢家屋敷跡の、向かつて右側（東側）山中に温泉神社がある。

その登り口に文化八年（一八一二）の已待供養塔には

「右ハいなわしろ道、左ハよねざわ道」と刻まれてい

る。米沢街道の大塩村より萱峠（大塩峠）の間には会

津藩によつて植えられた赤松並木が十数本残つてゐる。

萱峠付近の山々は塩をつくるために大量の樹木が伐採され一面萱が密集する山肌となつてしまつた。萱峠には茶店があり、この茶店は昭和二〇年ころまで営業していた。大塩の一里塚は大塩宿の



復元された大塩村の塩井

吉田松陰と米沢街道の旅

幕末維新期に、米沢街道を長州藩の尊王攘夷の志士・吉田松陰が旅をした。二二歳の松陰の東北遊歴は嘉永四年（一八五二）旧暦十二月十四日から嘉永五（一八五二）年四月五日までである。江戸を立ち、水戸から白河・会津若松・新潟・佐渡・庄内・本庄・久保田（秋田）と経由して、日本海側を碇ヶ関に出て弘前・小泊へ至り津軽三厩に着いた。帰路は奥州街道を南下し盛岡・石巻・仙台・米沢・会津に入り南山通りを通つて江戸に戻った。

松陰は嘉永五（一八五二）年旧暦三月二七日米沢を立ち、網木から檜原峠を経て大塩村に泊る。松陰『東北遊日記』によると（原文）「檜原嶺々上奥州界也。下嶺則檜原駅也。山中多出椀皿材。樹名謂不奈、仮填以撫字。造椀操為生者。山間自為部落。是謂集小屋々々云。嶺上望磐梯山。即向至会津。勢至堂所望也。宿大潮（大塩）。檜原大潮之間二里余。亦皆峻坂。而坂上残雪尚多。仙台白石。桃桜大半飄零。新緑陰々。而此間桜花盛開。而桃未開。樹葉夫新。滑津以往往來。嚴未生。多用濁活（うど）為羹（煮物の意）。大潮有塩井二。地中湧出。以手試之。則温泉試之千日。則誠。而其色赤黄。毎年四月至九月煎之。率得六百苞。苞容（藁などで包む）四斗二升（一〇八リットル）。但以費薪多。不能常煎々。此日行程

九里。八日発駅。至熊倉田此始為平地。至塩川。有二皆

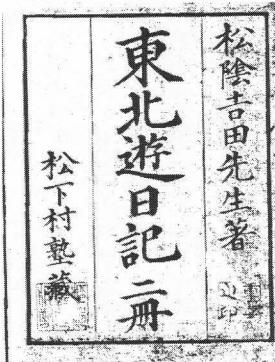
架橋。川發源迄猪苗代湖水。

流人津川。至若松」と記して

いる。松陰日記の中で檜原村・

大塩村について檜原村はブナ

材を材料として木地師がお椀



吉田松陰「旅日記」

福島県内の山塩

伊能忠敬や吉田松陰の大塩村での塩井の記録から、福島県内の山塩はどのように生産されていたのか。『たばこと塩の博物館』学芸員高梨浩樹氏に伺った。高梨氏は「日本の内陸製塩として『温泉製塩』が知られている。特に福島県会津地方を中心とする山が多く、新潟県、栃木県にまたがる地域には温泉製塩の記録がある。南西会津地方、南会津郡伊北村（南会津郡只見町）では僅かではあるが、明治末まで塩泉から製塩していた。温泉水を何回も砂にまき、乾燥させて鹹砂を得、それ

上に雪が多く残っていたこと、そして、大塩村には塩の井戸が二個所あり塩水が地中から湧き出していること。温泉水は赤黄色をしていて毎年四月から九月まで薪を用い煮詰めて作ること。収穫量は六〇〇包で、一包は四斗二升である。この日は三六キロ歩いたことを記している。この時代檜原・早稲沢・細野で産出された木地は總て会津領の小荒井・塚原・清治袋・村松新田、太郎丸など喜多方地方の塗師のもとに出されたと、「喜多方漆器業の歩み」に記録されている。松陰の東北遊歴は藩の許可なく東北の旅に出、多くの識者に会つたことが脱藩とみなされ帰国を命じられた。松陰が大塩村に滞在したのは嘉永五年のことである。翌年嘉永六（一八五三）年六月に浦賀に黒船が来航し國中が大騒ぎとなる。安政元年（一八五四）深夜伊豆、下田沖に停泊していたペリー提督のアメリカ艦隊を目指して小舟で乗り出す二人の若者がいた。松陰と金子重之助であつた。松陰は「下田踏海事件」により幽閉となり、その後『安政の大獄』で死罪となる。この偉大な思想家にもとつとゆつくりとした時間を与えてやりたかったとの思いを強く抱いた。

を溶出して鹹水（濃度の濃い塩水）を作り、煎じて結晶を取り出していた。会津の西方十八里の塩沢村（南会津郡只見町塩沢）には『塵塚物語』に塩井の場所、数、大きさとともに、塩焼小屋六軒、村民が農業の合間に製塩していたこと、他の村まで供給していたこと、味が軽く白い塩だったことが記載されている。福島県史の『津川廻り御用塩駄送人夫代御免願』によると従来から大塩組十一ヶ村と黒谷組の地域では、峠越で運ばれた尾道塩と、地塩（塩沢で生まれた山塩）だけで需要が賄われていたこと、塩沢産の山塩の供給圏が村外（奥只見大塩十一ヶ村）に広がつていったことが読みとれる。』

『塩専売史』の明治三六年の塩生産地一覧によると「南会津郡伊北村、塩田二畝五歩、釜数五、製塩場数一、塩生産高十八石」との記録がある。伊北郡大塩（沼郡金山町大塩）でも近世には製塩が行われた記録がある。『倭訓栞』に記すところの伊北郡大塩とは『塵塚物語』に登場する塩沢村のことであろうと思われる。明治未まで製塩が行われ、『製塩專史』には「生産高が十八石（明治三六年）」との記録がある。塩沢村の塩は、『新編会津風土記』で塩沢村山中塩沢川岸の洞窟から塩水が噴出し、塩焼小屋六軒もあり、村人は塩を造り隣の村まで塩を売り歩いたと言う。この製塩は明治未期まで続き、明治三六年の主計調査報告には生産高十八石と記載されている。北会津地方熱塩加納村（福島県耶麻郡熱塩加納村）は第二次大戦末期、陸、海軍が製塩した。陸軍は塩泉直煮、海軍が枝条架濃縮を行った後、煎したと言われている。耶麻郡の大塩村は第二次大戦末期、陸、海軍が製塩。陸軍が温泉直煮。海軍は枝条架濃縮を行った後煎じた。藩政時代の製塩は、藩の指示によるものであったが、藩内の需要を満たすもので、村民の需要も総て賄えたようであり、「地元の塩」で塩適応できていた希有な例と言える。特に価格の面に例がないのではないか。明治初頭の製塩廃止後も、



『新編会津風土記』に掲載されている大塩村の塩井

塩湯を樽で持ち帰るという形で脈々と温泉利用が続いていたと思われている。耶麻郡塩川町塩川は近世に製塩が行われた記録がある。『塵塚物語』には弘法大師が湧き出した伝説が記載されている。」と話された。

伊能測量隊大塩峠を行く

旧暦七月三日伊能測量隊は大塩村を出立する。『測量日記』には「七月三日朝霧深し、五ツ前（午前六時三〇分前）大塩を出立、一里四丁二〇間、檜原宿境に至る。これより一里四丁四〇間、合二里九丁、檜原宿（会津領）四ツ半後（午前一〇時三〇分）に着く。此の日両駅の間山道に而、佐原より湯殿山参詣の者に出逢。佐原に書簡を遣わす。測量者は九ツ後（午後十一時）に着く。服部善内、止宿に見廻に来る。

両駅宿の間山中に而、峠谷合、又大塩川流に添、左右共高山多し。此の村に渓間に而田畠なし。若松城下へ椀他挽物の下地をなして家業とす。一同家作よし。泊屋も余程あり。止宿問屋喜兵衛」と記している。

伊能忠敬測量隊は大塩峠（別名萱峠、茶店があつた）、蘭（あららぎ）峠の難所を越えて測量を続けてゆく。途中伊能忠敬の実家のある佐原より山形の湯殿山詣での一行に出会い、書簡を届けるように遣わした。忠敬はどこでこの書簡を同郷の者に託したのだろうか。大塩峠には茶店があった。この茶店で一休みし湯殿山参りをした佐原の顔見知りの者に、筆立を取り出し、「元気で測量を続けていた。家業に怠りがないよう」と一筆したため書き送ったものと思われる。この書簡について、伊能忠敬記念館の青木氏は「書簡を探しましたが、現在未発見です。」との返答だった。

蘭峠は分水嶺で大塩川と檜原川に分かれ。萱峠を下ると大塩川にかかる境橋がある。この橋は大塩村と檜原村の境界をなし、境界を北に進と、中ノ七里の手前に中ノ七里の一里塚跡があつた。この一里塚

は昭和五三年頃、林道工事のため二基とも破壊された。『新編会津風土記』によると「蘭峠には、深さ一間径八尺余の石窟があり昔山賊がここに隠れ、往来の者を脅し所なりとぞ。この辺り谷深く極めて幽玄なり。されば山に沿い岩をつたえて斜めに板橋を渡し、経路を通す。故に岩弗と名が付く、この辺にて時々鶏声を聞くとあり、ここより西の方数町に一里塚あり、檜原村は昔は檜原谷地と言う。四方に大山峠があり朝夕日光を隠し霜雪早く降り風気温が低く、境内は広いけれども茅原で不毛の地である。村民は自ら木地を引き望陀の皮を剥ぎ、あるいは旅店をもうけ駄馬を追つて生計をなす。それゆえ歳入常額外の地にて租税丁役なく村と称すれども諸組に属さず。耶麻郡に隸するのみなり。家数は五九軒出羽国米沢に通る街道にある。

村中に官より令せられる
掟條目の制札（高札場）
を掲げる」と記している。

伊能測量隊は檜原宿の問屋嘉兵衛宅に泊つた。

ここは若松城下に漆椀生地を作つている家であった。二同宿よしの記述がある。檜原村は江戸時代に課税が無く住民の生活は豊かであったのだろうか。それとも雪深い山里では太い柱の家作であつたのだろうか。



檜原村検断屋敷（現会津米沢街道歴史館）

伊能測量隊檜原峠に行く

旧暦七月四日朝曇り、六ツ半（午前七時）檜原出発、この朝も会津藩の物書き服部善内泊宿・問屋嘉兵衛宅へ見回りに来る。止宿・問屋嘉兵衛宅について北塩原村商工会の須藤仁一氏に調べていただいた。

「檜原村は磐梯山の噴火後湖面の下に水没した。村には検断の松本家と問屋があった。検断屋敷は水没前に檜原村の金山に移築し現在は北塩原村の歴史史料館として、昔の姿をとどめている。問屋嘉兵衛の子孫の方は須賀川に移られたと聞いている」と話された。伊能測量隊は問屋嘉兵衛宅を出発し、金山より大川の川沿いを北上した。道幅一間ほどの米沢街道には鷹巣の一里塚、会津藩の口留番所がある。『測量日記』には「一里十九丁、奥州、羽州の境則檜原峠に至る。ここまで会津領奥州耶麻郡なり。服部善内並びに桧原村宿御役人送り来る。これより則出羽国置賜郡にて米沢領なり」。

同宿網木宿、役人も檜原峠領界迄出迎え、綱木村（米沢領初）へ、四ツ半前（午前十一時）に着く」と記している。

筆者も檜原村金山より長井川沿い米沢街道を歩いてみた。金山は江戸時代に銀山があつた。長井川の川岸には会津藩は人や物資の流れを監視した「口留番所」があった。街道の道幅は約一間鷹巣の一里塚を過ぎ、林道を進むと「史跡旧米沢街道檜原峠別」の標識が見えてくる。七〇〇メートル先が桧原峠になるが、街道には倒木が重なり、

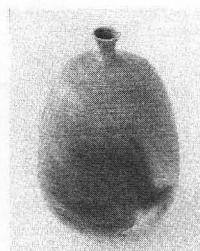


史蹟 旧米沢街道桧原峠別

川水で道が分断され米沢藩との藩境塚のある桧原峠に行き着くことができなかつた。伊能隊は檜原峠を越えて米沢、上山、新庄、秋田・青森へと測量を続ける。伊能測量隊は一日平均十二キロを徒步で歩き測量をした。街道の距離は麻縄を使い正確に計つた。朝早く出発し宿泊地ではただちに観測機器を設定し、夕食後星が出ると直ちに天体観測を始めた。三、七五四日の測量の旅の中で天体観測は八四〇日にもなつた。夜遅くまでデータを整理し翌日の出発の準備にとりかかる。大変な苦労があつたと思われる。伊能測量隊は北は蝦夷地（北海道）、東は伊豆七島、西は佐渡島、対馬、竹島、南は種子島、屋久島を測量しき日本全図を完成させた。伊能忠敬は七三歳で没したが、五六歳より足掛け十七年かけ第一〇次測量まで行つた。そのエネルギーに感服する。そして、五一冊の日記と多くの書簡を書き残した。平成に生きる我々は眞面目に努力した先人の教えに学ぶ処が多いと思う。

（了）

（まつみや てるあき あさかの学園大学講師・化学専攻・陶芸家）



辰砂窯变壺

松宮輝明氏作

忠敬墓碑銘・十七歳の書者—關研

植田浩

忠敬墓碑にかかわった人々

東京・東上野の源空寺の忠敬さんのお墓には、佐藤一斎が文を「くつた立派な銘文が刻まれてある。この墓碑銘は、大谷亮吉『伊能忠敬』と保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』の二大名著に全文掲載されていり、本誌34号の見事な拓本によつて紹介されているので、これらによつて忠敬さんの業績の大体は知ることができる。その墓碑銘の最後尾の行には、

どともいう。下灘は下旬ということ。灘の訓はアラフ、僧衣は十日毎に衣についた垢をあらい去ることから上灘は上旬、中旬は中灘という。淡海は近江のこと。琵琶湖はアワツウミであり、琵琶湖畔の大津を都とした天智天皇は淡海聖帝といわれた。關研は墓碑銘の第一行にある「一斎佐藤坦」の「爲文（文章をつくる）」した文。中国の白楽天の『立碑』という詩の中に「爲文彼何人（誰が書くんだ）」という句があり、文章をつくる時に、「爲文」という字句を使うものらしい。紙に書いた人。この場合は書丹（しよたん 石に丹（あか）で字を下書きすること）せずに、銘文を書いた紙を直接に石に貼りつけて字を彫つたものか。書丹した時は、書丹した人の名を書くのが普通である。

文政五年壬午嘉平用下漸淡海關研畫

とある。

忠敬さんが亡くなつたのは、文政元年四月十三日午後三時ごろだそうである。文政元年と書いたが、この年、文化十五年は四月二十二日になつて文政と改元されたのだそうで、忠敬さんが亡くなつたのは、文化十五年四月十三日と書くべきだつたかもしれない。ただ、その死は秘せられていたし、喪が明けるのは当然、文政になつてからだから、数えるのに便利な立年称元法によつたまでである。

忠敬さんの死後も作業は続けられ、「大日本沿海輿地全図」が完成、文政四年（一八二一）七月十日に幕閣上覽。忠敬さんの死も公表され（同年九月四日）、墓碑銘の準備が始められたのが文政五年（一八二二）というわけで、忠敬死後四年が経っている。壬午（じんご）は文政五年の干支（えと）で、ミズノエ、ウマと読み、この干支は朝鮮、中国も共通である。嘉平月は十二月の異称で、師走、極月、臘月、晚冬な

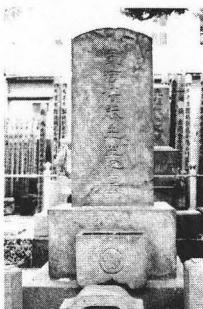
孝孫忠誨立

廣群鶴鑑

とある

忠敬さんの長男・景敬は忠敬の第二次九州測量中の文化十年（一八一三）六月七日に四十七歳で亡くなっているので、文化三年（一八〇六）生れの景敬の子が、林大学頭（述斎）から忠誨（ただのり）の名を貰い、忠敬の仕事を嗣ぐことになる。忠敬さんの孫になるわけである。その忠誨の日記の文政六年（一八二三）四月十四日の項『伊能忠敬研究第38号』に、

源空寺へ行く。祖父石碑出
来立つ故に、源空寺へ御布
施を上げる・・・



源空寺・伊能忠敬墓塔
三面に墓碑銘を刻む

いま源空寺墓地にある忠敬墓塔は、この時、文政六年四月十四日に立つたもので、忠敬さんの六周忌にあたる。忠敬さんの墓塔は、今は隣りに立つてある先生の高橋至時（よしひとき）のそれより大きい。「お目見え」以上の役職にあつた至時の墓より「お目見え」以下の役でしかなかつた忠敬の墓の方が大きいことを寺僧が難じると、景保（至時の後嗣）は、「かまわん、忠敬さんのなしとげた仕事は、親父（至時のこと）のした事より大きいのだから」と、そのまま作業を続けさせたという。後にシーボルト事件で「存命候はば死罪（実際には判決が出る前に獄死していた）となる高橋景保だが「國のためになることをした（未知の洋書を入手したいがため、代償として伊能図を渡した）」との信念は枉（ま）げなかつたという。その景保の亡骸は、罪人として捨てられたらしく残つていない。いま源空寺墓地にある追悼碑は、開国後に許されて来日したシーボルトが景保を悼んで述べた言葉を勒（ろく）したもので、昭和十年に有志が立てたものだという。

廣群鶴は、徳川時代中期から明治、大正にかけ、代々、廣群鶴を名乗つた字彫り石工で、赤坂の大久保公哀悼碑や、いま大田区の洗足池畔にある南洲詩碑を彫るなど、維新の二大英傑の記念碑にかかわり盛業だつたが、その後に廃業、いま上野の谷中六丁目の一乗寺門前の駐車場はそのあと地という。鏽の音はセンだが、訓でホリと読ませたいのかもしれない。鏽の代わりに鏽の字体を使つてゐる場合もあつた。

關研と岡啓次の謎
『忠誨日記』の文政六年（一八二三）一月三日



忠敬墓碑・正面拓本

という。

『忠誨日記』は、小さな字で読みづらいものだそうだ。日記はもともと他人に読ませるものでなく、あとで本人が分ればいゝものだから關研次と書いたのを岡啓次ととられても仕方ない。

岩波書店の『国書人名辞典』で検索すると、研→藍梁、通称研次に、『忠誨日記』に出でてくる。岡啓次なる人物は、忠誨が日記に、『關研次』と書いたのを後人が見誤つたことは完全に解決した。

の項（前の引用と同じ号）に、

江戸から佐原に帰つてゐる忠誨に、江戸から、忠敬の墓碑銘の原稿が出来（しゅつたい）したと知らせがあり、飛脚でお札を届ける。「佐藤」とあるは佐藤一斎のこと。「右」は忠敬墓碑銘の原稿のこと。これらをメモ代りに日記に書き入れた。墓碑銘の原稿にはハツキリと「關研書」とあるのに、どうして忠誨は日記に「認（したため）候仁、岡啓次」と書き残したのか。關研と岡啓次—長い間の悩みのタネだつた。ある日、フと気がついた。岡と關は似てゐる字だ。岡啓次とあるは關研の見誤（みあやま）りではないか。早速『忠誨日記』の原文を保管する佐原の記念館に電話する。古文書に精（くわ）しい職員の話——

とある。

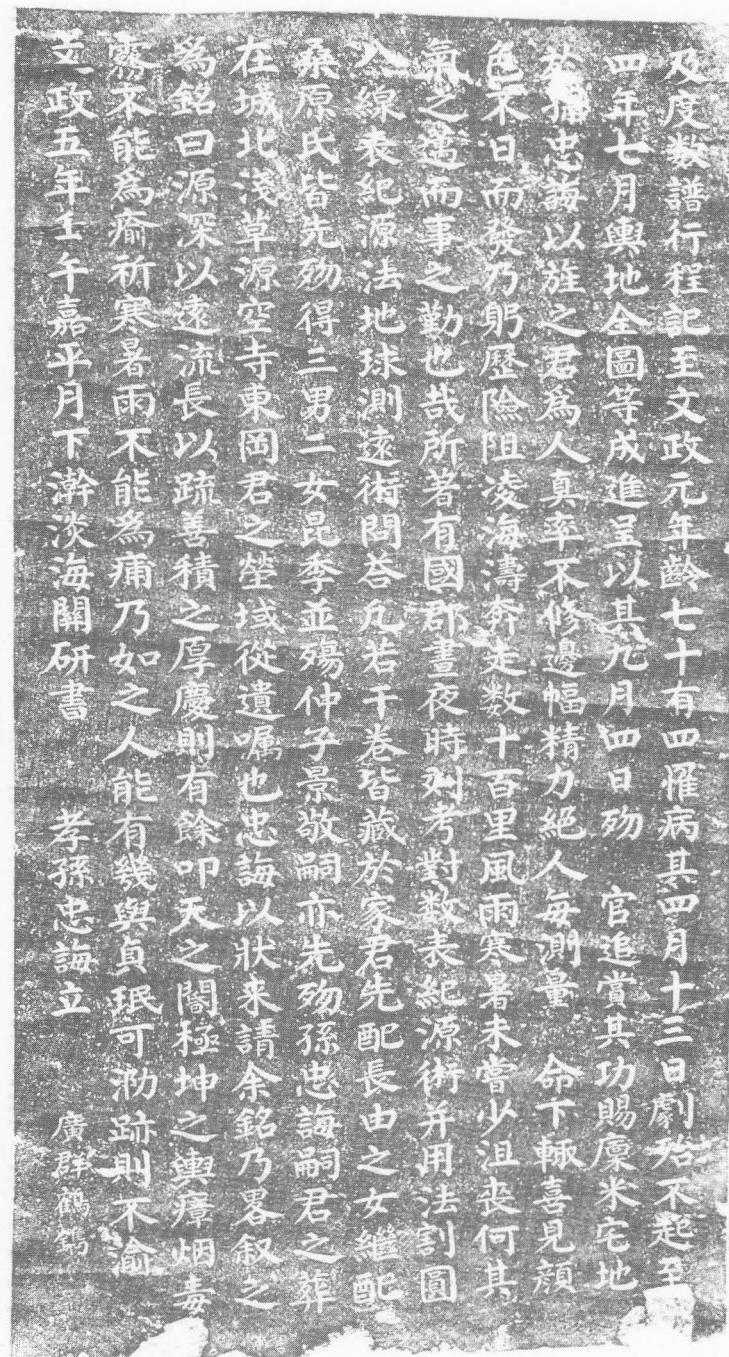
岡か關かはつきりとは分からぬが、どちらかといふと、關と書いたつもりかもしれない。その次の啓か研か、これもどちらも読める。最後の次はハツキリしている。

東河伊能君墓銘并叙

江都一齊佐藤坦爲文

君諱忠敬字子齊伊能氏號東河稱三郎右衛門晚稱勘解由北總查取郡佐原村人本姓神保氏南總武射郡小堤村神保貞恒之第三子出冒伊能氏伊能氏世爲閔右族其先出於大和高市郡西田鄉大同中有諱景能者知北總查取郡大須賀莊居伊能村因以氏焉子孫蟬聯占其地至永祿中有諱景久者始徙佐原天正中爲居民開肆廬貿易實君九世祖也高祖諱景利曾祖諱昌雄祖諱景慶考諱長由長由無子其配神保氏君之從祖姑也因丐君爲嗣長由不幸墮歿產頗荒君既來嗣慨然以幹蠶爲志昬夕黽勉務儉素禁奢靡家衆百口以躬率先之天正三年關東大饑君爲發私儲賑貸鄉里施及旁近村落多所全活六年又饑救之如初地頭津田州君並優賞之君好星曆至寃政六年委家事於子景敬躬獨來江都耑從事曆學當時所傳曆法君疑其

忠敬墓碑銘の文頭部分（第一面）



忠敬墓碑銘の文末部分（第三面）

ここで忠誨の生涯について触れておくと、父景敬は先きに記したように文化十年（一八一三）、八歳の時に亡くし、母は文政元年（一八一八）六月十三日に、弟鉄之助も同年十一月二十五日に亡、忠敬なきあと指導してくれた伯母の妙薰（忠敬の長女稱）も文政五年八月二十四日に亡、文政九年六月六日に妻クニとの間に生まれた長女・テイが翌七月二十六日に早死にすると、本人も翌文政十年（一八二七）二月二十日に二十二歳で病死、妻クニは生家に復縁。日本を実地測量するという大事業をなしこげた忠敬さんの血縁子孫はここに絶えた。約三十年後の安政年間に姻戚の男に嗣がせたのが現在の伊能家である。

英才・關研の事績

先きに引用した『国書人名辞典』によると、關研の出身地は「近江高島郡万木村」とある。会社の大先輩で、重役を退いてから、郷里の琵琶湖畔の町長を何期かつとめ、高齢で健在なことを聞いたことを思

い出した。その名は万木（ゆるぎ）英一郎さんという。關研の出身地・万木村というのは、ユルギ村と読むのかもしれない。もしかしたら、万木英一郎さんの系累の方かもしれない。早速、問い合わせの手紙を出した。

何回かのやりとりは略すが、次のような貴重な地元情報を得た。

關藍梁 名は關研字は克精、藍梁又は河西と號し晩に專靜と號す、

通稱研次、青柳村大字青柳字東萬木の庄屋八右衛門の子なり。文化二年四月七日生る。九歳の時祖父宗善に從ひて京畿に遊ぶ。妙齡にして能書の譽あり。後江戸に遊び鹿児島の教授兒島志堅に學び、志堅歿せしかば、文政五年三月林大學頭に師事し尋で昌平黌に入り、業大に進む。天保二年十月膳所侯世子の侍講となり、十一年十月同藩に仕へ、表小姓組となりて文學を典り、明年正月膳所へ移る。文

【参考】關研の出身地略図



安曇川（あどかわ）は中江藤樹の出身地、伊能測量を推進した堀田正敦・摂津守は堅田（かただ）藩主だったし、穴太（あのう）は石工集団の出身地。

久二年五月特に進められて鎗奉行に班せらる。藍梁、才學多能、殊に詩及び書に長じ、名聲府下に囂しく朝野の子弟、贊を其門に執るもの多し。安政元年米艦來航の際林大學頭に従ひて應接の事に當り、書記に任ず、幕府銀若干を賜ひて其の勞を賞す。異數なり。時に清人羅森、提督ペルリに従つて米艦に在り、七律を賦して和を求む。藍梁席上和韻して之に酬ゆ。使命を終へて後、藩侯に見る所を建言し、開港貿易の爲め、國産を獎勵するの必要を説き即ち膳所町の園山^{大学別保}に茶園を開く。文久二年閏八月十六日歿す、年五十八。江戸下谷西徳寺に葬り、墓碑に大學頭林昇の撰文を勒せり。藍梁人と爲り渾厚溫籍絶えて崖岸なく、少より學を嗜み詩に長し、書札を善くす、名聲一時に噪しく業を受けし者多かりき。著はす所駢題詩裏及遺稿若干卷あり。子機、維新後膳所に居り遵義堂に教授たりしが、廢藩の後東京に移れり。

（昭和四十七年増補『高島郡誌』）

最初に出てくる大学頭は林述斎（第八代）、二回目の大学頭は述斎の四男復斎（第十一代）、三回目の大学頭林昇とあるは復斎の次子で二代。遵義堂は膳所（せぜ）藩の藩校、廢藩とは明治四年のことか。

十七歳で忠敬墓碑銘を書す

地元からの情報は、江戸に遊学する前から「能書の譽」があり文政五年（一八二二）三月からは林大学頭に師事したとある。この大学頭とは林述斎のことで、四歳下で莫逆の友である佐藤一斎に家塾のことは任（まか）せ、自分の方は官学の昌平坂学問所の拡充に努めた。述斎と一斎の友情は終生かわらずという。關研は一斎の指導も受けたはずである。關研の文化二年（一八〇五）生れということは、『国書人名辞典』記載の情報とも一致しているので、忠敬墓碑銘を書いた時（文政五年末）には十七歳である。十七歳で、これだけの長文の銘を書せるとは、漢籍につぐ重要な教科である書道の、まことに英才といえる。

關研の更なる情報を求めて西徳寺に行ってみる。いまは京都・仏光寺の東京別院になつてゐるそうで、西徳寺住職は京の本寺の部長として出張中。その在京都の住職と電話がつながる——大正十二年の大震災で寺は灰燼に帰し、その後に復興。今あるのはすべて昭和三年以降のもの。留守僧に過去帳を見せられる。

法名不詳 文久二年 関 流木
八月十六日 研次

とある。

『高島郡誌』の伝える林大学頭（家禄三千五百石）撰文のついた藍梁の墓塔もない。この大学頭とは、ペリーとの日米交渉を纏めた林復斎が安政六年（一八五九）九月十七日に死去、その後を嗣いだ復斎の

次子・昇で、幕府瓦解で最後の大学頭となつた。

西徳寺の資料では、關研の没年は、

過去帳（西徳寺）

文久二年八月十六日

高島郡誌

国書人名辞典

文久三年八月十六日

となつてゐる。歴史を繙（ひもど）くと、会津藩主松平容保が京都守護職に任命されたのが文久二年閏八月一日とあるから、文久二年八月にはたしかに閨があつた。

關研と佐藤一斎

關研は若くから江戸に遊学、佐藤一斎の指導を受けた。一斎は安永元年（一七七二）生れだそうで、文化二年（一八〇五）生れの關研の三十三、年上になる。

一斎の墓所にお参りした。東京麻布・六本木交差点近くの深広寺というお寺で、本堂と庫裏と一斎の墓苑だけ。

私事にわたるが一斎は幕末の大学者というより身近かな先達だった。われわれの受験生時代、漢文は入試科目だったので、中学でも漢文教育に力をいれ、二・三年に『十八史略』、四年に頼山陽の『日本外史』、五年に一斎の『言志四録』が漢文の副読本だった。『言志録』は内容がむずかしく素通りが多かつたが、現実には入試に出題されることがあり、悩みの種だった。後年、西郷隆盛の事績を取材するうち、彼が一度目に島流しになつた沖永良部島には一斎の『言志録』だけを持参、拳々服膺（けんけんぶくよう）につとめたと知つた。

深広寺の一斎の墓塔は一きわ大きく二メートル高くらいあり、正面に「惟一先生佐藤府君之墓」とあり、左、背、右の三面にビツシリ銘

文が刻まれてある。府君とは敬称。銘文を拾い読みしていくと、一斎は安政六年（一八五九）九月二十四日亡（これは大学頭林復斎が亡くなつた七日後である）。初婚片岡氏先歿、次阪本氏離縁、三婚中根氏、銘文の書は市河三鼎。三鼎は米庵の長女の子で米庵の嗣子。谷中・御殿坂の本行寺を探訪した時、米庵寿藏碑（生前に建立する墓塔）があつたことを思い出した。当代一の漢学者・一斎と貫名海屋、巻菱湖とともに幕末の三筆の一人とされる米庵の間では（両者とも安永年間の生れ）、墓誌の口約束があつたのではないか。「オレが死んだら、オマエ墓誌を頼むぞ」と。米庵寿藏碑（安政二年十月建立）の撰文を一斎、その一斎が安政六年に八十八歳で亡くなると、米庵はその一年前の安政五年七月十八日に八十歳で亡くなつてゐるので、米庵の後継者の三鼎が一斎の墓誌を書するという図である。

一斎・研・群鶴

一斎の墓塔の右となりに中根氏の墓がある。源空寺の忠敬墓塔と同じくらいの大きさで、正面に「梅闇孺子中根氏之墓」とある。一斎後妻の中根庸の墓で、儒者の夫人は号の次に孺子のことばをそえるものらしい。左、背面の二面に刻まれてある三百字近い墓誌を拾い読みする——文化四年（一八〇七）、二十九歳で一斎の繼配となり、先妻の子を含め三男十女を育て、一斎に四十六年、連れ添い、一斎より先に嘉永五年（一八五二）一月二十九日に亡くなる。關研は、この一斎の後妻に随分、世話になつたんだろうなと思つて、墓碑銘の最後の行を読むと、

嘉永五年壬子二月下解 夫佐藤坦記 關研書 廣群鶴鑄

とあり、「夫佐藤坦記 關研書 廣群鶴鑄」に驚いた。忠敬墓碑銘と同じ、一斎・研・群鶴の三点セットに再会したわけである。数えて

みると、忠敬墓碑銘は文政五年（一八二二）の銘があつた。梅闇夫人銘は嘉永五年（一八五二）だから、この間、三十年となる。字彫りの群鶴の方は代々、同じ名義だそうだが、「爲文」の一斎が長寿なることは十七歳の時）から、こういうことになるのだろう。何年かぶりに会う三点セットの内、一番、なつかしかつたのは關研だった。深広寺探訪のかえりがけ、關研書の部分拓本をとつた。（左掲）彼の姓セキの字は、今の常用字体は關だが、本字は『高島郡誌』で使つてゐる關で、研は忠敬墓碑銘を書した十七歳の時も、三十年後に一斎夫人をおくる時も關という字体であつた。關は關の略字だそうである。

（うえだ こういち・元朝日新聞）



「關研書」の部分拓本
(麻布・深広寺 中根氏墓)

◆多摩のあゆみ126号

特集

江戸時代の多摩を歩く

伊能忠敬測量隊の東京多摩地区測量（一）

佐久間 達夫

・期間

文化六年（一八〇九）八月二七日 江戸出立

文化八年（一八一二）五月八日 江戸帰着

・測量隊員

伊能勘解由（忠敬）

坂部貞兵衛（天文方手付下役）

下河辺政五郎（天文方手付下役）

青木勝次郎（天文方手付下役）

永井甚左衛門（天文方手付下役）

内弟子／植田文助、梁田栄蔵、箱田良助

供侍／成田豊作、黒田藤吉、松井沢次

竿取／平助、長藏

従者 五人

・伊能忠敬測量日記（佐久間達夫校訂）

文化八年五月五日武藏国小仏駅出立

（前略）武藏国多摩郡には、江戸幕府にとつて重要な街道である「甲州街道」「大山道・江戸道」「八王子道」があり、伊能測量隊にとつても精密な地図作製に「本州の太平洋側から日本海側までの横切り測量」が必要であったので文化八年（一八一一、第七次測量）と、文化一三年（第九次測量）の二回に分けて測量している。

二 甲州街道の測量

甲州街道の測量は、第七次九州一回目測量の帰路、武藏国小仏駅

（文化八年五月五日出立）から八王子宿、府中宿、下高井戸宿を経て、江戸内藤新宿へと測量する。
忠敬はその時の様子を「測量日記」に記している。以下、測量日記には適宜句読点・送り仮名を付した。固有名詞は原文のままである。

○第七次九州一回目、中山道、山陽道、中国内陸部、甲州街道測量

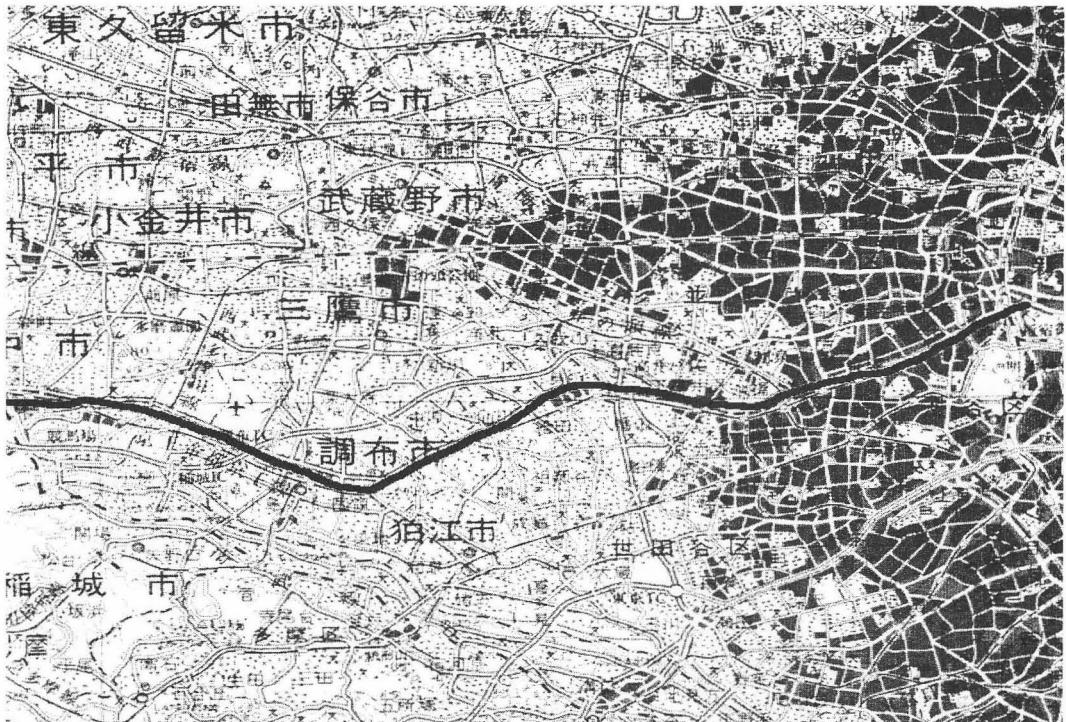


図1 大日本沿海輿地全図（伊能中図 重要文化財）の多摩周辺部
(東京国立博物館蔵 Image: TNM Image Archives)

図2 「伊能忠敬測量日記 十七」第七次測量記録、部分（伊能忠敬記念館蔵）

知行散田村字新地。伊奈御代官所八王子十五組内、本郷宿、千人町、八木宿、八幡宿、八日市場、日光街道追分、横山宿、相州川越追分制
札前一里二十七丁八間四尺。制札より本陣まで百五間。横二十二間。
二口メ外、横山宿・八日市湯宿一ヶ月代に駆。外に仕越新町限迄八丁
三十間、合二里二十五丁三十二間四尺。先手坂部・梁田・上田・箱
田・平助、小仏駅より無測にて上柄田村へ行、高尾山を測る。高尾山
有喜寺薬王院御朱印七十五石。本尊薬師、護摩堂、經堂、鐘樓、飯細
大権現、本地不動明王、末社六ヶ所、唐銅五重塔、元龜元年北条氏康
建立。中興破却江戸赤坂某再建。坊中十八院、山中に淨土院あり。余
は山下に在。境内大本多し。仏法僧と云鳥啼と云。右寺の中門より測
初、**高印**迄測繫ぐ。二十二丁二十間二尺。後手は九ツ前、先手は九
ツ後八王子横山宿へ着。止宿本陣川口七郎兵衛、脇鯛屋勘治。八ツ半
頃より雨。深更より大雨朝に至る。

同六日 朝先手七ツ半後出立。無程大雨。後手見合六ツ半頃八王子
横山宿出立。後手我等青木・永井・梁田・平助。昨日測留新町限りよ
り初。左 大沢右膳知行所元横山村、右建部六右衛門・高井但馬守知
行子安村。久松忠治郎・前田繁之助知行所大和田村。川渡十二間、伊
奈助右衛門・川崎平右衛門御代官所栗須新田・日野新田入会、川崎平
右衛門御代官所日野宿、郷名日野本郷、二十五丁四十七間、先手の初
繫ぐ。又日野宿○印より初、一ノ宮測る。伊奈助右衛門御代官所・
志村文一郎知行所宮村・上田村、松平龜五郎知行所高幡村、新義真言
宗御朱印三十石高幡山金剛寺、神保喜内知行所三沢村、同真言宗御朱
印六石六斗八谷山医王寺、大久保矢九郎知行所上落川村、松平団書知
行所下落川村、同真言宗御朱印六石清谷山真照寺、中山勘解由・桑島



分の1地勢図「東京」(平成10年発行に加筆) 丸数字部分詳細図あり

神天下春命、社人新田主水・大田左門迄測る。一里十七丁十六間。先手坂部・下河辺・上田・箱田・長藏。栗須新田・日野新田入会・日野宿界より初。牛頭天王御朱印十四石、別当新義真言宗土済山普門寺。宿界より初。牛頭天王御朱印十四石、別当新義真言宗土済山普門寺。日野宿制札迄測る。二十六丁三十三間。同一宮街道(○印まで三丁三間、字常安寺家一軒、玉川河原幅三百三間、内水二十九関舟渡。伊奈助右衛門御代官所柴崎村字下和田、立場中食年寄元右衛門、字角家二軒。川崎平右衛門代官所青柳村・石田新田入会、同上谷保村、御朱印十石臨濟宗谷保山南養寺、同上谷保村・下谷保村入会、天満宮御朱印三十石別當天台宗梅香山安樂寺、同四ツ谷村、同本宿村字小野宮、同屋敷分村、同府中番場宿字片町、御朱印十五石臨濟宗龍門出高安寺、番場駅本陣前迄測る。日野宿制札より二里九丁二十七間、合三里。先手九ツ頃、後手八ツ頃府中番場宿本町着止宿本町本陣。東町、高橋三郎右衛門、坂(坂部)宿松屋忠治郎、下青永(下河辺・青木・永井)宿鳴屋鉄五郎。此夜大曇。

同七日 朝雨。先手六ツ、後手六ツ後府中本町雨中に出立。後手我等青木・永井・箱田・平助、多摩郡本町より初。惣社六所宮御朱印五百石。鎮座大己貴命・素戔嗚尊・布留乃神・伊弉冊尊・瓊々杵尊・大宮比売命。延喜式内、大麻乃豆大神・小野神社両宮一社、慶長十一年御建立、御普請奉行大久保石見守。正保三年悉焼失、寛文五年巖有院殿御再建。今猶存。東照神君、神主沢渡(猿渡)左衛門佐、於帝鑑返村地先、伊奈助右衛門御代官所上飛田給村、同布田五ヶ宿の内上石原宿、府中本町より一里九丁。同下石原宿、上石原より六丁四十八間。上布田宿の内小島分村、上布田宿、下石原より七丁六間、上下布

手坂部・下河辺・上田・箱田・長藏。栗須新田・日野新田入会・日野宿界より初。牛頭天王御朱印十四石、別当新義真言宗土済山普門寺。宿界より初。牛頭天王御朱印十四石、別当新義真言宗土済山普門寺。日野宿制札迄測る。二十六丁三十三間。同一宮街道(○印まで三丁三間、字常安寺家一軒、玉川河原幅三百三間、内水二十九関舟渡。伊奈助右衛門御代官所柴崎村字下和田、立場中食年寄元右衛門、字角家二軒。川崎平右衛門代官所青柳村・石田新田入会、同上谷保村、御朱印十石臨濟宗谷保山南養寺、同上谷保村・下谷保村入会、天満宮御朱印三十石別當天台宗梅香山安樂寺、同四ツ谷村、同本宿村字小野宮、同屋敷分村、同府中番場宿字片町、御朱印十五石臨濟宗龍門出高安寺、番場駅本陣前迄測る。日野宿制札より二里九丁二十七間、合三里。先手九ツ頃、後手八ツ頃府中番場宿本町着止宿本町本陣。東町、高橋三郎右衛門、坂(坂部)宿松屋忠治郎、下青永(下河辺・青木・永井)宿鳴屋鉄五郎。此夜大曇。

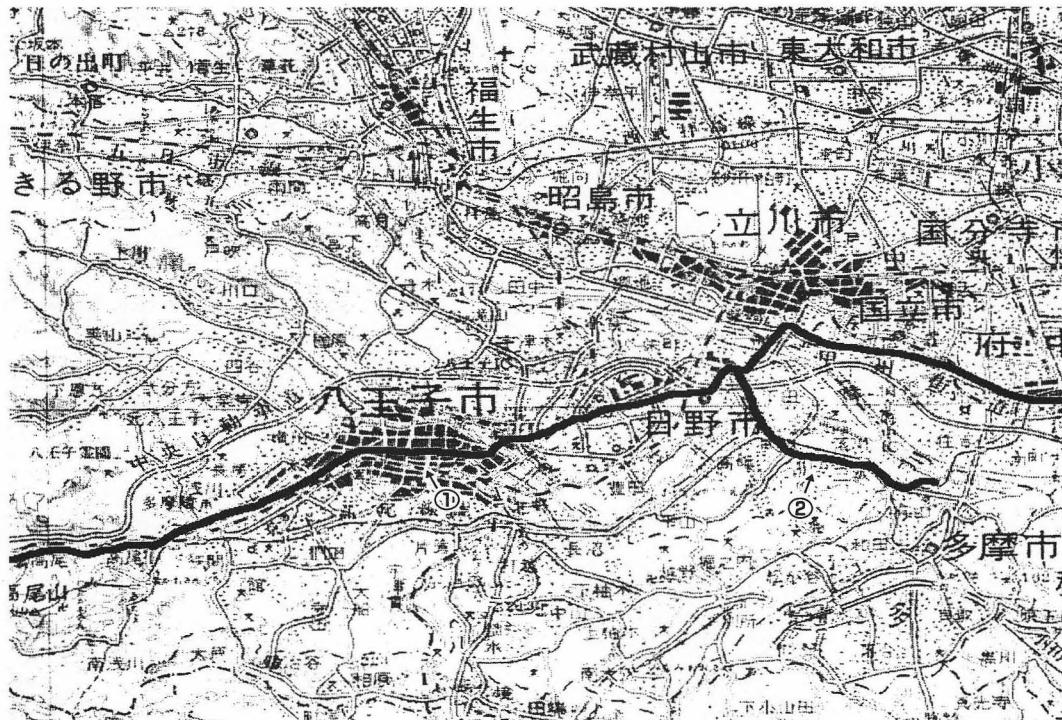


図3 第七次測量、小仏—内藤新宿間の行程（国土地理院20万

田境、先手の初繋ぐ。上布田制札より二丁二尺、下布田制札まで一丁九間、先手測る。合一里二四丁五十四間二尺。布田五ヶ宿は駅を一宿六日宛相勤、所謂五ヶ宿は上石原宿・下石原宿・上布田宿・下布田宿・国領宿、此一宿は先手測る。先手坂部・下河辺・梁田・上田・長藏。多摩郡布田五宿の内、伊奈御代官所、五ヶ宿共地方にては村、上下布田境より初、制札一丁九間。国領宿制札迄、測初より四丁二十四間。下布田宿飛地、国領宿、近隣云下国領、左佐橋左源太知行・右伊奈助右衛門御代官所柴崎・金子村。それより柴崎村字間橋、左右金子村、右側深大寺村地先、街道四十八間三尺、人家一軒出。左側五十五間三尺、御朱印十三石四斗曹洞宗深谷山金竜寺境内、右石谷主水知行・左伊奈助右衛門支配所入間村・金子村、左伊奈御代官所中仙川村字滝沢、左右入間村字滝坂、左飯高弥五兵衛知行所下仙川村、右石谷主水知行所入間村、右伊奈御代官北野村飛地、左右下仙川村、品川追分あり、四里ほど。天台宗大慈山昌翁寺御朱印十四石。右伊奈御代官所・三浦久五郎・五郎三郎知行所給田村、左下仙川村、左右給田村、伊奈御代官所鳥山村、同上高井土宿制札迄、国領より一里十八丁十八間。中食武藏屋伊兵衛・後手は名主三左衛門。増上寺御仏殿領、北沢村、伊奈助右衛門御代官所下高井土宿。上高井土より十三丁三十三間、合二里一丁二十四間迄測る。本陣玉屋吉右衛門、坂（坂部）宿角屋伊左衛門、三人宿名主五右衛門、両手共九ツ前着。此夜曇。

五月八日 朝曇、四ツ後より晴、又曇。六ツ後下高井土宿出立。一同手測、多摩郡下高井土駅より初。右荏原郡大貫治右衛門支配所赤堤村・松原村入会、左多摩郡内田主計知行所和泉村・松原村字代田橋、右大貫支配代田村、左豊嶋郡大貫支配和田村、左右神谷縫殿之助知行所幡ヶ谷村字笛塚、右大貫支配代々木村、寺社領多し、略す。左大貫支配角筈村、左右同じ。右千駄ヶ谷村、同戸田越中守屋敷、左水

。

左衛門・同平右衛門道喜・加納屋治兵衛・妙薰・お琴・伊能治三郎、当所迄迎に出る。伊能鉄之助も中途迄出る。

知行所幡ヶ谷村字笹塚、右大貫支配代々木村、寺社領多し、略す。左大貫支配角筈村、左右同じ。右千駄ヶ谷村、同戸田越中守屋敷、左水谷弥之助稻垣長門守屋敷、左渡辺平十郎屋敷、左右川崎御代官所、内藤新宿初より制札迄一里三十二丁二十七間、上町字追分梅印より青梅街道榜示杭に繋ぐ、一丁七間。

梅印より左牧野越中守屋敷、中町谷新宿初より制札迄一里三十二丁二十七間、上町字追分梅印より青梅街道榜示杭に繋ぐ、一丁七間。梅印より左牧野越中守屋敷、寺社領多し、略す。左大貫支配角筈村、左右同じ。右千駄ヶ谷村、同戸田越中守屋敷、左水谷弥之助稻垣長門守屋敷、左渡辺平十郎屋敷、左右川崎御代官所、内藤新宿初より制札迄一里三十二丁二十七間、上町字追分梅印より青梅街道榜示杭に繋ぐ、一丁七間。

</

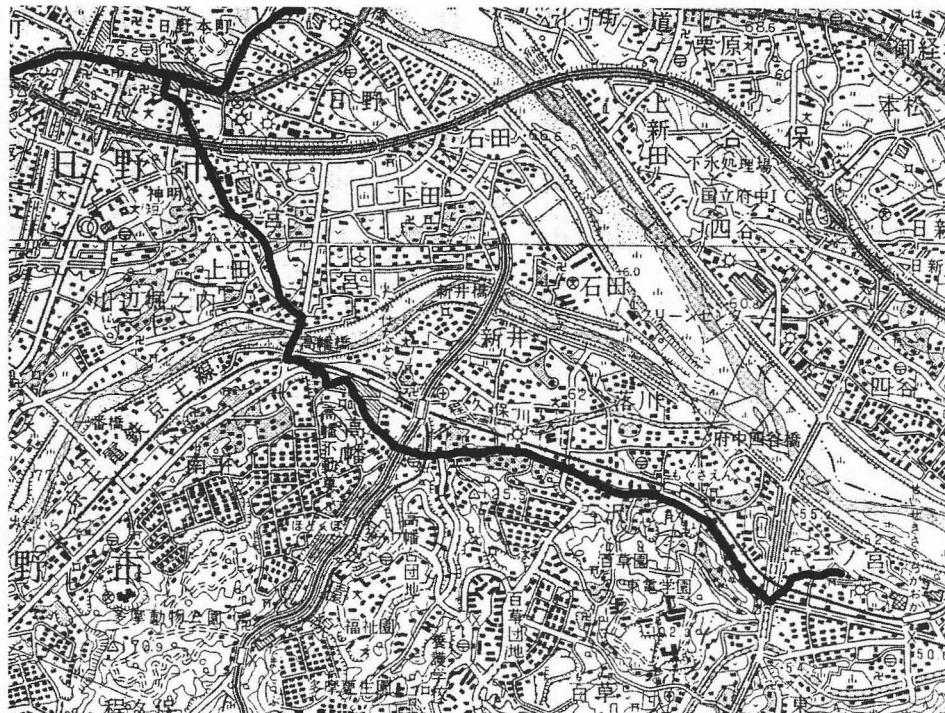


図5 図3の②部、日野—一ノ宮の行程

(国土地理院5万分の1地形図「青梅」平成9年発行「八王子」平成12年発行に加筆)

注：66, 67 頁に

図6, 図7あり



『多摩のあゆみ』第128号

発行 財団法人たましん地域文化財団

編集 たましん歴史・美術館歴

史資料室☎042-574-1360

季刊：2, 5, 8, 11月の15日発行

たましんの窓口等で無料配布。

(さくま たつお・元伊能忠敬記念館館長 千葉県香取市在住)

(次号につづく)
(この後厚水道測量省略)

・伊能忠敬測量日記（佐久間達夫校訂）
文化一三年三月一日 平塚宿出立。文化一三年三月二三日 長津
田村（現横浜市）出立。次に鶴間村から扇町屋宿までの測量日記を記
す
中町止宿前ヨリ初メ。
（この後厚水道測量省略）

（次号につづく）

永井甚左衛門（隊長息敬、老齢のため不参加）
門谷清次郎（天文方手付下役）
坂部八百次（天文方手付下役）
内弟子 箱田良助 保水敬藏
竿取 多田要吉
長持 田中吉兵衛
従者 四人

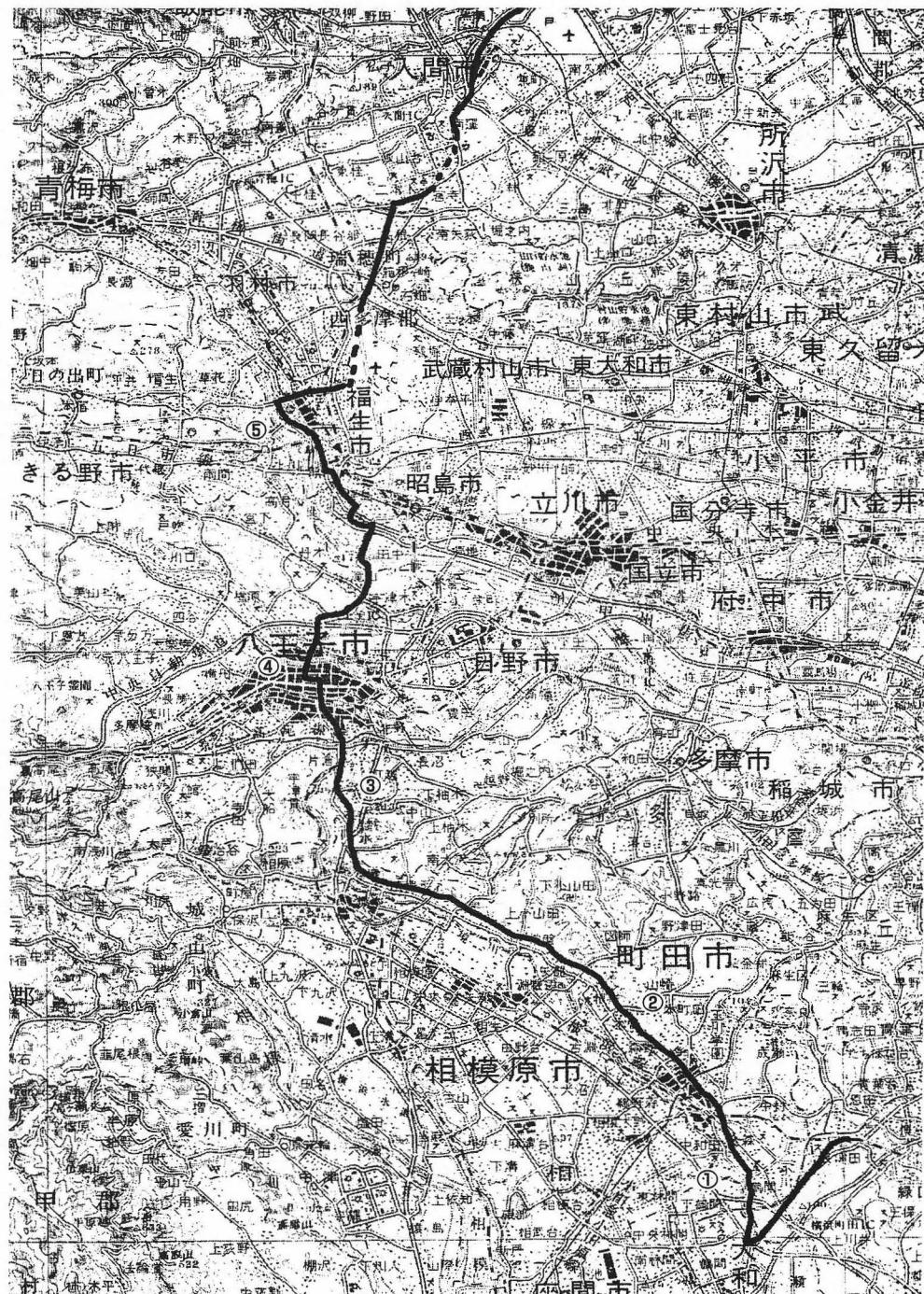


図6 第九次測量、長津田村—扇町屋宿の行程

(国土地理院20万分の1地勢図「東京」平成10年発行に加筆) 丸数字部分詳細図あり

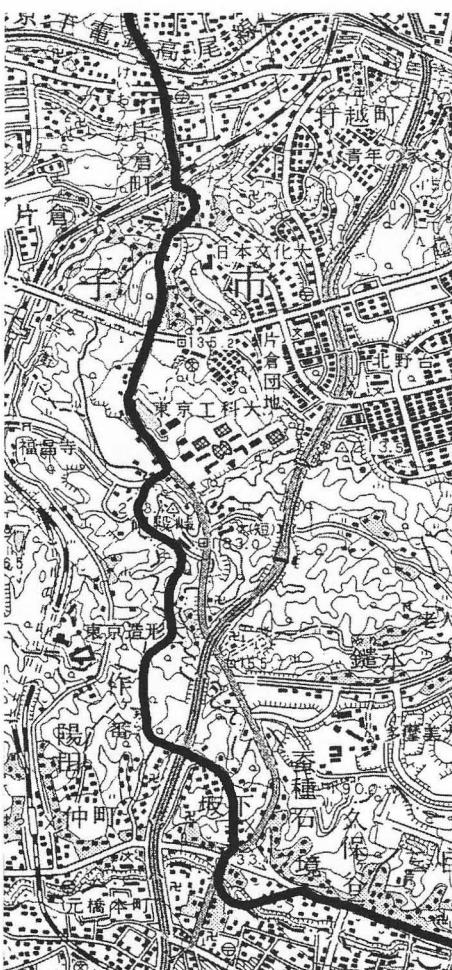
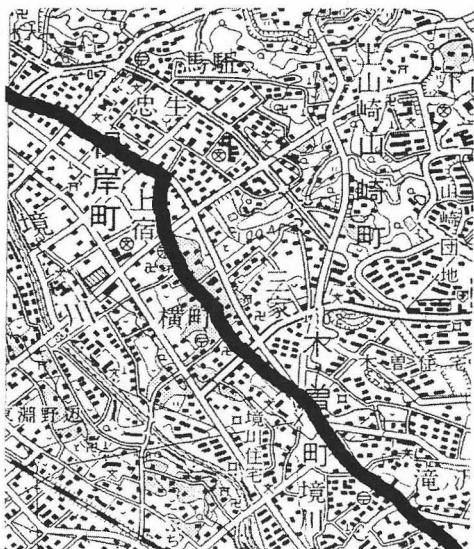


図7(右上) 図6の①部、下鶴間・町田付近

(国土地理院5万分の1地形図「八王子」平成12年発行「藤沢」平成4年発行に加筆)

図8(左上) 図6の②部、町田市木曾付近

(国土地理院5万分の1地形図「八王子」平成12年発行に加筆)

図9(左下) 図6の③部、御殿峠付近

(国土地理院5万分の1地形図「八王子」平成12年発行に加筆)

'08 九州支部春季例会報告

石川 清一

去る五月三一日（土）例年と同じ、福岡市立南市民センターに於て初参加二人を加え総勢一六名の出席を得て開催した。初参加の伊万里市からおいでの方は宮地滋氏は昨年は直前に思わぬアクシデントでやむなく欠席、今回は無事出席出来ました。もう一方、奥永渚さんは忠敬三女・琴女のご子孫（六世孫に当たる）で二〇代とまだお若く、思うに全国最年少の会員ではないでしょうか。今回、ご両親と一緒におりになりました。

例会は来賓に国土地理院九州地方測量部根本恵造次長を迎えて、定刻一時開始。私より当研究会の近況や、来年が伊能忠敬の九州測量二〇〇周年に当たるので、来年又は再来年に記念行事（例会兼講演会のようなもの）を今後検討したいことなどを報告した。星整代表理事からの「九州の活動は大変貴重だ、引き続きの活動を期待する」との励ましのメッセージを披露し、早速講演の部に入った。今回は外部からお二方、会員からお三方による計五つの講演となり、終了時間ギリギリまで各講師の熱演が続いた。少し盛りだくさんで疲れたのではと心配したが、皆さんお元気でした。例会終了後日本料理店に移り懇親会を行つた。談論大いに盛り上がり終始賑やかにすゝみ八時近くお開きになり、今年も忠敬先生のお引き合せに感謝しつゝ帰路につきました。皆様長い一日おつかれさまでした。

なお、講演の概略は別記の通りです。



参加者（後列）原口 国重 奥永 奥永 馬場 遠藤 山下 井上 野田
(前列) 河島 宮地 奥永 石川 中富 松尾(紀) 熊谷



国土地理院九州地方
測量部長 菱山剛秀氏

■講演（1）「明治時代の伊能図の活用について」

菱山剛秀氏（国土地理院九州地方測量部長）

・演者は公務多忙の中、夕刻東京行き前の貴重な時間を講演頂いた。
・明治初期近代国家建設にあたって、全国を実際に測量し、統一した方法、表現で作成し、その内容に信頼があつた伊能図の存在は大変貴重である。国の骨格を示す基本図として明治以降も国の事業として引き継がれ、現在も更新され続けており、その果たした役割は非常に大きいことを種々の角度から論述された。

■講演（2）「伊能が見た薩摩城下町」

福田光一氏（全国測量設計業協会連合会九州地区協議会会長）

・演者は鹿児島県測量設計業協会会长でもあり業界関係の役職を多数され大変多忙な方で、この週も東京での会議からわざわざ福岡に寄つて頂いた。実業人として活動のかたわら測量の先達、伊能忠敬に関心を持ち、立派な資料、冊子も作成され忠敬への熱き思いがひしひしと伝わりました。

■講演（3）「麻田学派と天文学について」

河島悦子氏（「歴史街道を歩く会」代表）

・演者は若い時から歴史古道へ関心を持ち、長年九州の各街道を踏破され、特に伊能測量と重なる長崎街道、唐津街道については著作を出し、上記街道研究には欠かせない一冊となつていて。今回講演にあたり、剛立の出身地大分県（豊後）杵築まで再度確かめに出向いたとのことで、郷土の偉人と云うべき麻田剛立を地元で知っている人が少なく、顕彰事業もあまりないらしく意外だつたようです。

・剛立は高橋至時先生が天文学を学び、忠敬先生も孫弟子にあたる、師というべき人であるが表面にすることは少なかつたか。麻田暦、土

御門家の暦、渋川春海の貞享暦にも少しふれられたが、暦は難解です。暦のことでは小生ふと明治改暦事件を思い出した。明治五年十二月二日、それまでの太陰暦を廃止し西洋と同じ太陽暦に変え、十二月三日が明治六年一月一日になり当時十二月が一ヶ月弱なくなり社会に大混乱を引き起こした故事を。（現代ならどうなるでしょうか。）

■講演（4）「維新をつないだ道と筑前福岡藩の事情」

遠藤薰氏（図書出版のぶ工房編集者）

・演者は伊能忠敬関係出版で注目されている福岡市内の若手編集者。

・幕末の雄藩・薩長土肥は本当は薩長土肥筑前（福岡）の五藩だった（なるはずだつた）との説。すなわち筑前福岡藩には明治維新前後に

京を追放され都落ちした三条実美など公家（いわゆる「七卿落ち」）（文

久三年）、「五卿落ち」（慶応元年）や高杉晋作、西郷隆盛など志士達が當時福岡藩内に入り太宰府往還を経て大宰府に滞在もした。また藩内で高杉、月形洗藏ら多くの勤王の志士を支援した野村望東尼（のむらぼうとうに）など傑物もいたが、惜しまらくは福岡藩十一代藩主黒田長溥（くろだながひろ）薩摩藩主島津重豪の第九子、黒田家に養子入り）の「乙丑の獄（いっしゅうのごく）」により勤王派の家老はじめ主要人物が一掃されたため維新に乗り遅れる結果となつた。

■講演（5）「伊能忠敬が歩いた肥前路」

馬場良平氏（「塚崎・唐津往還を歩く会」事務局長）

・演者は銀行勤務のかたわら佐賀の歴史道をコツコツと研究を行つており伊能忠敬も測量で通つた佐賀県内の歴史道を毎週歩く度に、現在の地図と見劣りしないその伊能測量技術の高さにびっくりするとのこ

とです。（いしかわせいいち・九州支部長）

お知らせ

例会案内——隔月の例会をはじめます

所在地 〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17

電話 03-5600-8666 FAX 03-5600-8677

森下文化センター <http://www.kcf.or.jp>

電車

都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分

都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分

①都バス門33系統「亀戸駅」—「豊海水産埠頭」「高橋」下車

②都バス業10系統「業平橋駅」—「新橋駅」、東20

系統「錦糸町」—「東京駅北口」「森下5丁目」下車徒歩3分

バス

■このたび二ヶ月に一度の例会を九月から実施することになりました。会員が講師となり、それぞれのテーマで講演をおこないます。運営担当は新沢義博さん。講演後には質疑応答をかねた懇親会で交流をはかりながら、さらに知識を深めます。地図を間近に見ながら講師の解説を聞いたり、日頃疑問に思っていた事柄について講師に親しく質問できる機会です。ぜひご参加ください。会場は江戸深川資料館、清澄庭園、芭蕉記念館、靈巖寺にもそれほど遠くない場所。早めに到着して秋空の下、史跡巡りを楽しむのはいかがでしょうか。

■第一回例会（九月例会）

○日時 九月一四日（日）一三時～一七時

○会場 江東区森下文化センター 和室（下欄 案内図参照）

○講演（一三時～一六時）

・「話題になつたいくつかの大図写本—海洋情報部所蔵図ほか」

・「伊能忠敬と箱田良助（菅茶山との交流）」講師・鈴木純子さん

・質疑応答・懇親会（一六時～一七時）

○参加費 1000円（講師謝礼を含む）当日会場で

○申込 不要 直接会場へお越しください。

○問合せ先 担当・新沢義博さん（☎090-5765-8152）

■第二回例会（十一月例会）

○日時 十一月九日（日）一三時～一七時

○会場 江東区森下文化センター 和室（下図参照）

○内容 講師の方は現在交渉中です。



お便りから



■石谷春香さん 川崎市

こんにちは春香です。暑いですね。私の家ではクーラーが壊れてしまつたので家の中にいると死んでしまいそうです。それから夏休みの宿題も多くて死んでしまいそうです。来週はバスケの合宿を行つてきます。原稿はいつもありがとうございます。今回もたくさん載せていただいてとてもうれしいです。

■伊藤栄子さん 東京都練馬区

この春、足の怪我をいたしまして、未だにやつと近くを歩いている有様です。

■入江正利さん 長崎市

体調のよい時に対馬藩の『測量御用記録』を読み直しています。

■梅田和雄さん 神戸市

六月二六日は朝日新聞の記事と第五二号内、佐久間先生の新史料『石井記録』紹介を大変

うれしく読ませていただきました。まだまだ新しい事実が判明している事がうれしく思いました。

■大宮信篤さん 松山市

秋の研修旅行で当地へお越しの事。お待ちいたしております。

■劇団俳優座・古賀伸雄さん 港区

相変わらずこつこつ頑張っています。

■加藤巷児さん 狹山市

小島一仁氏が亡くなられたこと会報五一号で

知りました。私が伊能忠敬について最初の勉強も氏の著書のおかげです。謹んでご冥福をお祈りいたします。合掌。

■久保木恒雄さん 柏市

我壯健也。会報は熟読します。

■高瀬芳夫さん 千葉県香取郡東庄町

いつも機関誌を心待ちにしております。七月十一～十三日は佐原大祭です。夜、小野川へ映る祭りの風情は格別のものがあります。

■直江泰子さん 筑西市

会報有難うございました。先日、友人達が佐原へ出かけ記念館でとても御親切に説明して頂き、又、充実ぶりに感激して居りました。石谷さんのレポート素晴らしく、友達に訪れる参考に見せたいと思います。

■野田茂生さん 大野城市

三月に体調を崩し、なかなか元の状態にまで戻りません。

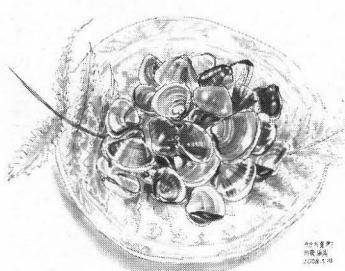
■花田敏行さん 登別市

いつも会報を楽しく読ませていただきおります。室蘭の本輪西に「伊能橋」という橋があります。退職後に室蘭と伊能忠敬の関係を調べてみたいと考えております。

■原口光和さん 大野城市

間宮林蔵の研究文献があれば伊能忠敬との比較も含めておもしろい企画が出来るのかな、と思つております。間宮林蔵の樺太と大陸の研究も素晴らしいものです。

■平川定美さん 佐世保市



九十九里町 片貝海岸

2008.5.14 江口俊子さん画

二・三年後には伊能忠敬の郷土測量の実態について、まとめて出版したいと思っています。

■福田弘行さん 新座市

四月から「四国八十八ヶ所の今」を歩きだしました。全部歩けば一二〇〇キロの行程。忠敬さんが訪ねた徳島市内の寺、高知城下伝右衛門宅絵図、宿泊した室戸の二五番津照寺と三八番寺は健在。松山寺は消えていました。

■藤岡健夫さん 横浜市

石谷春香嬢、大変な生徒さんです。先号の紀行文が大変面白かったのですが、今回は忠敬の測量法から自分の足で緯度一度を実測するとは、おどろきです。この先がたのしみです。

■山本公之さん 小平市

静嘉堂文庫に茶碗の美・国宝・曜変天目を思い掛けない誘いで見に行つた。展覧会案内を手に取つて驚いた。二〇〇九年二月一四日から三月二三日古地図の楽しみとして伊能図などが展示されるとのことです。

日々の話題



お知らせ

■伊能忠敬記念館

☎ 0478・54・1118

◇特別展『伊能図の評価 評価される忠敬』展
期間 9月9日(火)～11月9日(日)



■表彰 渡辺一郎さん（作品賞）鈴木純子さん（功労賞）が日本国際地図学会賞を受賞しました。



■論説掲載 吉田正人さんの論説「日本は途上国に資金協力を」が六月二十五日付朝日新聞「私に資金協力を」が六月二十五日付朝日新聞「私の視点」欄に掲載されました。

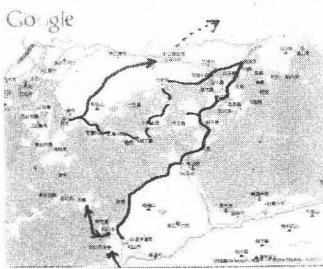


■出版 斎藤仁さんの著書が刊行されました。

『図説 自然と環境』

吉川書院
2008年5月15日
斎藤仁・江口曼他著

57-3951



申込 9月10日迄
佐原支部・香取
禧良さん宛 FAX
Xにて申し込み
所が盛り沢山で
す。この機会に
お誘い合わせて
ご参加ください。

行程 第一日目 羽田空港→広島空港→福山
神辺 箱田良助生誕地→大和ミュージアム
第一日目 竹原→白水港→明石港→小長港
御手洗→小長港→明石港→木江港→宗方港
II 大三島→大山祇神社→向上寺・耕三寺→しまなみ海道→今治国際ホテル（宿泊）

第三日目 今治国際ホテル→高浜→大浦・中

島港→市民センター→中島港→高浜→道後・
松山市内観光→松山空港→羽田空港

参考費 73000円（振込先 研究会口座）
備考 神辺、御手洗、入船山記念館、大浦忽那
八幡宮参拝と、個人では足の運びにくい見

◇講演会『早稲田大学図書館所蔵伊能図（大図）について』

講師 早稲田大学図書館職員
日時 10月4日(土)午後2時
場所 香取市中央公民館

【5頁に特別展の関連記事】

■静嘉堂文庫美術館03・3700・0007
◇『静嘉堂文庫の古典籍 第7回 古地図の楽し

み―江戸の町を歩く』「伊能図」ほかを展示

2009年2月14日(土)～3月22日(日)

■八王子夢美術館042・621・6777
「タツノコプロの世界展」9月15日まで

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動を行つております。

—予定—

- ①会報の発行 第54号締切 9月末 発行11月
- ②例会・見学会の開催 第55号締切 12月末 発行2月
- ③忠敬関連イベントの主催または共催 第56号締切 3月末 発行5月
- ④その他付帯する事業 第57号締切 6月末 発行8月

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、

入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合には、当該年度のバツクナンバーをお送りします。

四、事務局所在地 (04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転)
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

伊能忠敬研究会

電話・FAX

03-3466-9752

事務局メール

junko-sz@jcom.home.ne.jp

(07年8月よりアドレスが変わりました)

郵便振替口座

〇〇一五〇一六一〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2~8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。手書き、CD、メール添付可。(FD要相談)一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ
<http://inoh-tadtaka.org/> (休止中)

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

伊能忠敬研究会「資料室」：現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。(担当・坂本幹事)
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

伊能忠敬図書館：忠敬関係の文献、画像資料。(担当・前田)
<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

編集後記

◇北京オリンピックの陰で忘れられかけているが、四川大地震は死者約九万人の大災害だった。実はこの地震を予言していた人物がいる。

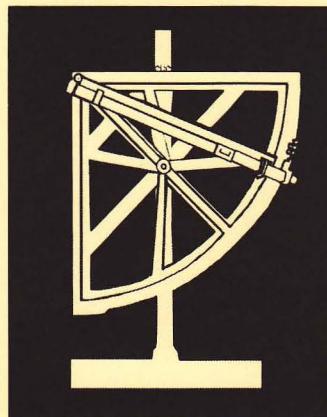
◇李四光(一八八九~一九七一)は大陸油田を発見するなど中国では大変著名な地質学者だが、「中国は六〇年以内に四回の特大地震が起きる」と予言していたという。その四回とは唐山、台湾、四川、福建。前の三つは的中した。次は福建だ、と中国では話題になつてゐるそうだ。◇それはさておき、この李四光さんは歩測の達人だった。仕事柄よく地質調査に出かけたが、日頃から一步八十五cmの歩幅を保つよう

に修練を積んだので、歩くだけで露頭の大体の長さや幅を知ることが出来たという。◇この話は「一步八十五厘米的精神」として児童向けの偉人伝に載せられている。「中国の伊能忠敬です」と中国人の知人は言つた。◇一方、十九世紀後半に一七年間にわたり朝鮮半島を踏破、独立で「大東輿地図」という近代地図を作り上げ、「朝鮮の伊能忠敬」といわれる金正浩。この人の話も大変面白いが、また次の機会に。(M)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.53 2008



TOPICS I

- Historic Spots about Inoh Tadataka (3)
Report of General Meeting 2008
The Inoh Family's Lacquered Helmet
New Documents about "Funate" of the Domain of Karatu
News Reports about "The Ishii's Memorandum"
Exhibitions of "The Large-Scale Inoh Maps" and "Wasan"

TOPICS II

- Reproduction of Inoh's Measurement with Ropes on the Sea
Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (7)
A Visit to Asada Goryu's Birthplace

FROM VISITORS' REGESTERS

ARTICLES

- Buildings and Treasures of Todaiji-Temple
Big Earthquakes in "*The Survey Diary*"
Study of Inoh Tadataka (3)
Inoh Tadataka and the Yonezawa Highway(2)
Seki Ken as a Calligrapher of Tadataka's Epitaph
Inoh's Survey in Tama(1)

BRANCH REPORT

- Spring Meeting of Kyushu Branch

MEETING ROOM

- Informations about Regular Meetings
Letters from Members Daily Topics and Informations

Kawasaki Michiyo	1
Editorial Department	2
Editorial Department	5
Editorial Department	6
Editorial Department	8
Editorial Department	10

Watanabe Ichiro	11
Hoshino Yoshihisa	16
Kawashima Etsuko	26
Inoh Yoko	28

Sakuma Tatsuo	30
Tsujimoto Motohiro	34
Ishiya Haruka	38
Matsumiya Teruaki	46
Ueda Koichi	52
Sakuma Tatsuo	59

Ishikawa Seiichi	68
------------------	----

Editorial Department	70
Editorial Department	71

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY